

岸東遺跡発掘調査報告書

2024

加古川市教育委員会

岸東遺跡発掘調査報告書

2024

加古川市教育委員会



写真1 調査地上空から志方山塊を望む（南から）



写真2 調査区オルソ合成画像（下が西）

巻頭図版2



写真3 調査区全景（北東から）



写真4 SB2（南から）

序 文

加古川市は、播磨平野の東部を流れる一級河川加古川の恵みにより、古くから人々が暮らす豊かな場所です。発掘調査を行うと、その確かな軌跡が地中から姿を現します。

このたび完成した本書は、西神吉町岸に所在する岸東遺跡の発掘調査報告書です。

岸東遺跡は、加古川右岸に位置する中世の集落跡です。その立地などから城館跡とも想像されてきた本址ですが、今回の調査では村落的な様相をあらわす集落の一部が見つかり、この地に暮らした人々の生活を知ることのできる貴重な成果を得ることができました。

本書の刊行が、市民の方々にとって郷土の歴史・文化を理解する資料として、また、文化財保護へのご理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、現地での発掘調査実施及び報告書作成にあたり、多大なご協力を賜りました関西住宅販売株式会社様、地元住民の方々をはじめ、関係機関、関係各位に厚くお礼申し上げます。

令和6年3月

加古川市教育委員会
教育長 小南克己

例 言

- ・本書は、兵庫県加古川市西神吉町岸地内において計画された宅地造成工事に先立ち実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。調査は「岸城跡」として実施したが、その後名称を変更し「岸東遺跡」として報告している。
- ・発掘調査及び整理作業、報告書刊行までに要した経費は、事業主である関西住宅販売株式会社様に多大なるご協力を賜った。
- ・本調査は、加古川市教育委員会が主体となって実施し、事業主より委託を受けた企業組合神戸労協及びmatsuura株式会社の協力を得た。
- ・発掘調査は、令和4（2022）年5月13日から同年6月10日までの期間において実施した。
- ・整理作業及び報告書作成は、令和4年6月24日から開始し、令和6（2024）年3月31日の報告書刊行をもって終了した。
- ・調査期間中（令和4年度から令和5（2023）年度まで）における調査体制は以下のとおりである。

加古川市教育委員会

教育長 小南克己

教育指導部

部長 桐山朋宏

次長 杉本達之

文化財調査研究センター

所長 河村孝弘

副所長 宮本佳典（学芸員）

庶務担当係長 萩原美和（令和4年度）、赤坂睦子（令和5年度）

事業担当係長 山中リュウ（学芸員、調査補佐）

主査 前田正尚、高下 寛

学芸員 平尾英希（調査補佐）、古林舞香（調査担当）

埋蔵文化財専門員 岡田美穂

- ・遺物の水洗・注記・接合・復元は、加古川市会計年度任用職員 窪田美佳・佐藤 薫が行った。
- ・遺物の実測・トレース及び遺構図のトレースは、matsuura株式会社が行い、遺物観察表の作成は古林が行った。
- ・本書に掲載の遺構写真は古林、山中が撮影し、空中写真撮影・オルソ写真撮影及び遺物写真の撮影はmatsuura株式会社が行った。遺構写真の整理は加古川市会計年度任用職員 井上かおりが行った。
- ・挿図及び図版の作成は加古川市会計年度任用職員 佐藤・西村秀子、古林、matsuura株式会社が行った。
- ・本書の執筆・編集は古林が行った。
- ・本調査において得た諸資料及び出土遺物は、加古川市教育委員会が保管・管理している。
- ・発掘調査から報告書の作成に至るまで、下記の方々からご指導、ご協力を賜った。記して感謝申し上げます（五十音順）。

岡田章一氏、岡本一士氏、宮下愛美氏、森内秀造氏

凡 例

- ・本文及び挿図における標高は、東京湾平均海面（T.P）を用いた。また、遺構全体図中の座標値は世界測地系（第Ⅴ系）に基づき、現場での作図段階で設定したものである。
- ・上記の座標を基準とし、調査区全域に5 m間隔のグリッドを設定した。
- ・本書に掲載した遺構種別ごとの略称は以下のとおりである。
掘立柱建物跡（SB）、柱穴列（SA）、井戸（SE）、土坑（SK）、ピット（SP）、溝（SD）
- ・本書中の挿図の縮尺は、遺構図は1/40を基本とし、溝のみ1/60とした。遺物実測図は1/4とした。なお、上記と縮尺が異なる場合は個別に明記した。
- ・遺構図における線種・線号は以下のとおりである。
調査区（実線・0.4mm）、遺構の上端（実線・0.3mm）、遺構の中端（実線・0.2mm）、遺構の下端（実線・0.1mm）、攪乱（実線・0.1mm）、復元線・隠れ線（破線）
- ・土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所『新版標準土色帖』（2014年版）に準じた。
- ・遺物実測図における番号は、出土した遺構に関わらず全体で通し番号を付している。
- ・遺物実測図中の線種は、外形線・中心線・区画線は実線、ナデによる稜線は破線で示した。
- ・遺物実測図の断面は、須恵器は黒色、それ以外の遺物は全て白抜きで表現している。
- ・遺物観察表の計測値で用いている「*」は復元値、「>」は残存値を表す。

目 次

巻頭図版

序文

例言

凡例

目次

第Ⅰ章	はじめに	1
第1節	遺跡の位置	1
第2節	調査に至る経緯と経過	1
第3節	地理的環境	4
第4節	歴史的環境	5
第Ⅱ章	調査成果	10
第1節	既往の調査と調査概要	10
第2節	基本層序	10
第3節	遺構と遺物	14
第Ⅲ章	総括	25

図版

報告書抄録

挿 図 目 次

図1	遺跡の位置	2	図10	掘立柱建物跡 (SB) 3	16
図2	事業対象範囲	3	図11	柱穴列 (SA) 1	17
図3	遺跡の範囲	3	図12	井戸 (SE) 1	18
図4	周辺の地形と地質	4	図13	土坑 (SK) 1～9	19
図5	周辺の遺跡	6	図14	ピット (SP) 1～19	20
図6	遺構配置図	11・12	図15	SP2・SP9 出土遺物	21
図7	基本層序	13	図16	溝 (SD) 1～5	22
図8	掘立柱建物跡 (SB) 1	14	図17	遺構外出土遺物	24
図9	掘立柱建物跡 (SB) 2	15			

表 目 次

表 1 周辺の遺跡一覧	7	表 4 溝一覧	22
表 2 土坑一覧	21	表 5 遺物観察表	23
表 3 ピット一覧	21		

図 版 目 次

写真 1 調査地上空から志方山塊を望む(南から)	巻頭図版 1	写真32 SK7 (南西から)	図版 5
写真 2 調査区オルソ合成画像(下が西)	巻頭図版 1	写真33 SK7 断面 (東から)	図版 5
写真 3 調査区全景 (北東から)	巻頭図版 2	写真34 SP2 (南から)	図版 5
写真 4 SB2 (南から)	巻頭図版 2	写真35 SP2 断面 (南から)	図版 5
写真 5 SB1 (下が南)	図版 1	写真36 SP3 断面 (南から)	図版 6
写真 6 SB1 P4 (西から)	図版 1	写真37 SP4 断面 (南から)	図版 6
写真 7 SB1 P4 断面 (西から)	図版 1	写真38 SP6 (東から)	図版 6
写真 8 SB1 P6 (南西から)	図版 1	写真39 SP6 断面 (東から)	図版 6
写真 9 SB1 P6 断面 (南西から)	図版 1	写真40 SP7 (北東から)	図版 6
写真10 SB2 (下が南)	図版 2	写真41 SP7 断面 (北東から)	図版 6
写真11 SB2 P2 断面及び柱根状況 (南から)	図版 2	写真42 SP9 (南から)	図版 6
写真12 SB2 P3 断面及び柱根状況 (南東から)	図版 2	写真43 SP9 断面 (南から)	図版 6
写真13 SB2 P5 断面 (南東から)	図版 2	写真44 SP12 (南から)	図版 7
写真14 SB2 P7 断面 (南東から)	図版 2	写真45 SP12 断面 (南から)	図版 7
写真15 SB3 検出 (東から)	図版 3	写真46 SP13 (南から)	図版 7
写真16 SB3 (下が南)	図版 3	写真47 SP13 断面 (南から)	図版 7
写真17 SB3 P1 断面 (東から)	図版 3	写真48 SP16 (南から)	図版 7
写真18 SB3 P2 断面 (南西から)	図版 3	写真49 SP16 断面 (南から)	図版 7
写真19 SB3 P3 断面 (東から)	図版 3	写真50 SD2 (東から)	図版 7
写真20 SB3 P4 断面 (東から)	図版 3	写真51 SD2 断面A-A' (東から)	図版 7
写真21 SA1 (下が南)	図版 3	写真52 SD3 (東から)	図版 8
写真22 SA1 P1 断面 (北東から)	図版 3	写真53 SD3 断面B-B' (東から)	図版 8
写真23 SA1 P3 断面 (南東から)	図版 4	写真54 SD4・5 (東から)	図版 8
写真24 SE1 検出 (南から)	図版 4	写真55 SD4・5 断面C-C' (東から)	図版 8
写真25 SE1 (南西から)	図版 4	写真56 基本層序 A-A' (南東から)	図版 8
写真26 SE1 上層 断面 (南西から)	図版 4	写真57 基本層序 B-B' 下層確認 (南から)	図版 8
写真27 SE1 下層 断ち割り状況 (南西から)	図版 4	写真58 基本層序 C' 地点 (西から)	図版 8
写真28 SK1 (南から)	図版 5	写真59 北側池 下層確認状況 (南東から)	図版 8
写真29 SK1 断面 (北から)	図版 5	写真60 実測遺物 1~10	図版 9
写真30 SK6 (東から)	図版 5	写真61 実測遺物 11~18	図版 10
写真31 SK6 断面 (東から)	図版 5		

第I章 はじめに

第1節 遺跡の位置

岸東遺跡は、兵庫県加古川市西神吉町岸に所在している（図1）。

加古川市は、播磨灘沿岸部の中央付近に位置し、東は稲美町・播磨町・明石市、北は加西市・小野市・三木市、西は高砂市・姫路市と接している。市域中央を一級河川である加古川が南北に貫流し、広大な平野部には、市街地中心部を国道2号線やJR山陽本線が、沿岸部を国道250号線（明姫幹線）や山陽電車が横断し、東西を結ぶ主要交通網が集中する地域となっている。市街地周辺が市の中心部として賑わう一方で、市域の北側には豊かな自然や田園風景が広がり、対する沿岸部は工業地域として機能するなど、地区により異なった性質を持つ。

岸東遺跡が所在する西神吉町岸は市域西端部に位置し、町の南西部は高砂市神爪、高砂市阿弥陀町魚橋と接する。地形としては、東西を山地と丘陵に挟まれた平野部にあり、西の高御位山塊、南西の竜山に沿うように法華山谷川が南北に流れる。東西に伸びる微高地上には住宅地が広がり、南側の低地部分には一部に農耕地が残るものの、全体としては都市近郊住宅地の様相を呈する。集落のすぐ南には国道2号線（加古川バイパス）が通り、各方面へアクセスの良い立地である。

第2節 調査に至る経緯と経過

調査に至る経緯 関西住宅販売株式会社（以下「事業者」という。）は、兵庫県加古川市西神吉町岸691番地外8筆（1684.80㎡）において宅地造成工事を計画した（図2）。

工事着手に先立ち、事業者から加古川市役所開発指導課に開発事前届の提出があった。加古川市教育委員会（以下「市教委」という。）は、開発指導課から届出に対しての意見照会を受け、当該地が文化財保護法（以下「法」という。）第93条第1項の規定に基づく周知の埋蔵文化財包蔵地に該当することを伝え、工事着手の60日前までに法に基づく届出（以下「発掘届出」という。）が必要である旨を回答した（図3）。

こうして、事業者から市教委に令和3年4月13日付で当遺跡の発掘届出が提出された。当該地では過去に開発が計画されたことがあり（註1）、その際に実施した確認調査成果から、工事を実施するためには着手前に記録保存のための本発掘調査が必要であることが明らかとなっていた。そのため、市教委はこのことを伝え、事業者と工事内容の見直しや調整を行い、令和4年3月4日付で兵庫県教育委員会（以下「県教委」という。）へ発掘届出を進達し、同年3月11日付で県教委から記録保存のための本発掘調査実施の通知を受けた。市教委は事業者と本発掘調査に向けての協議を行い、工事計画上遺跡の破壊を免れない範囲（503㎡）について、記録保存を目的とする本発掘調査を実施することとした。調査にあたっては、動線の都合により敷地の出入り口にあたる調査区北東の張出し箇所（24.6㎡）についてのみ反転掘削を行った。

なお、当該地の遺跡名称は当初「きしじょうせき岸城跡」であったが、古記録などに基づくものではなく、城館跡の存在は予てより疑問視されていた。今回の発掘調査によって当遺跡が集落跡の性格をもつことが明確になったため、市教委は令和4年8月17日付で周知の埋蔵文化財包蔵地の変更報告を県教委へ提出し、遺跡名称を「岸東遺跡」と改め、遺跡種類を「集落跡」に変更している。



図1 遺跡の位置

調査経過

[令和4年度]

- 5月13日：バックホーによる表土掘削を開始。
- 5月16日：随時遺構検出を開始。
- 5月17日：西側池下層確認のため北壁沿いで深掘りを実施。
- 5月18日：表土掘削完了。
- 5月19日：全体検出写真を撮影。遺構掘削及び平面・断面測量を随時開始。
- 5月25日：各壁面写真を撮影。
- 6月1日：遺構完掘。ドローンによる航空測量及び完掘写真を撮影。北側池下層確認のため西壁沿いで深掘りを実施。
- 6月2日：SE1下層確認のため断割りを実施。調査区埋戻しを随時開始。
- 6月3日：調査区北東部の反転掘削を開始。表土掘削後、随時遺構検出。
- 6月7日：遺構掘削及び平面・断面測量を実施。
- 6月8日：遺構掘削完了。平面測量を実施。完掘写真を撮影。
- 6月10日：反転部分の埋め戻し、調査終了。
- 6月13日：現場撤収完了。

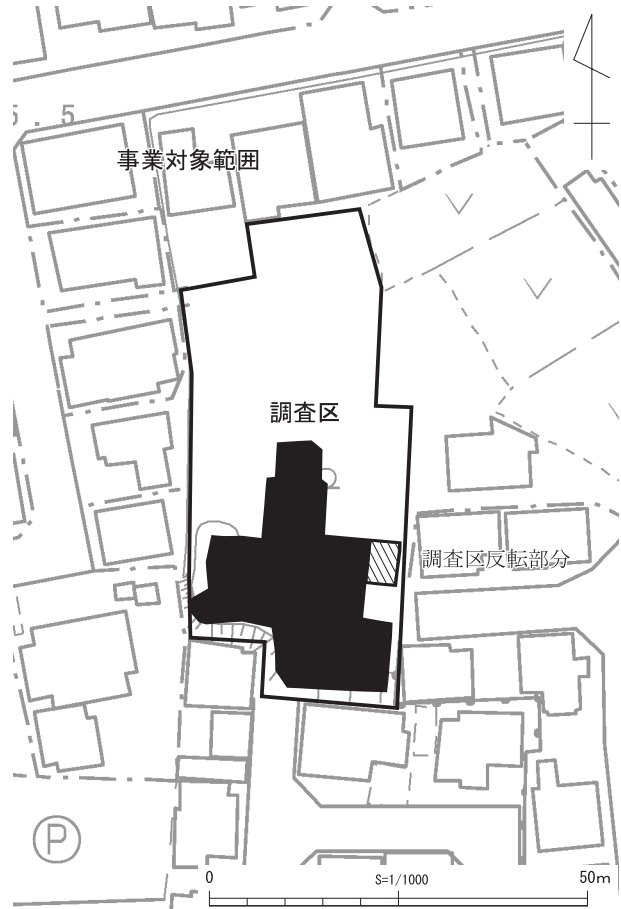


図2 事業対象範囲



図3 遺跡の範囲

第3節 地理的環境

加古川地域の地形は、市域の中央を流れる加古川によって形成された河岸段丘と沖積低地からなる平野が市域南側に広がっていることが第一の特徴である。市域の北側は、加古川を境とした東と西で違った様相を呈する。左岸にあたる市域北東部では、「いなみの台地」と称される六甲山系の隆起扇状地が加古川沿岸から明石川沿岸付近にかけての広範囲に及び、旧加古川の河道や播磨灘からの浸食を受けて形成された幾段もの段丘が複雑な微地形を造り出している。一方の右岸にあたる市域北西部では、流紋岩質溶結凝灰岩及び花崗岩からなる標高150mから300m程度の山地と谷底平野が多くを占めている。

岸東遺跡は加古川右岸の東西に伸びる河岸段丘上に位置している（図4）。『加古川市史第一巻』において、この段丘は3段に分かれる野口段丘の第2面と分類された低位段丘で（田中1989）、左岸から伸びる台地の先端部である。南側は升田山から西方に流れる旧河道の浸食を受けて段丘崖が形成され、遺跡が位置する段丘面と南に広がる氾濫原・沖積低地とで現況凡そ5m前後の高低差を生み出している。



『加古川市史』第四巻付図1「加古川市とその周辺の地形・地質図」を元に作成

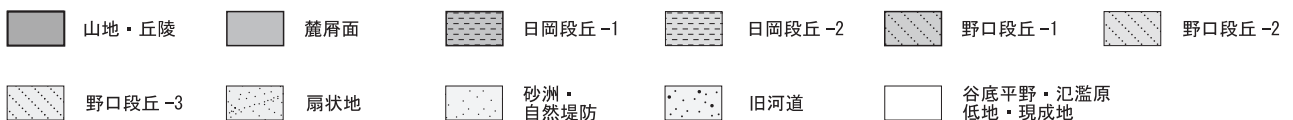


図4 周辺の地形と地質

第4節 歴史的環境

加古川市では、加古川の流れによって形成された地形環境の下で各時代を通して多様な性格を持った遺跡が営まれてきた。ここでは、岸東遺跡（図5-514、以下括弧内の番号は図4及び表1と対応）の周辺地域と加古川右岸の様相について時代ごとに取り上げ、その歴史的環境の概観を述べる。

旧石器時代・縄文時代 加古川地域において旧石器時代の遺構の発見例はないが、湖沼や山地の周辺で石器が発見され、散布地として認知されている地点が多く存在する。岸東遺跡の位置する低位段丘上では、中西台地遺跡（13）で有舌尖頭器が、神爪遺跡B地点（高47）でナイフ形石器などが発見されている。このほか、竜山遺跡（高82）、新櫃池遺跡（3）などが把握されている。

発掘調査などにおいて明確な人類の痕跡が遺構として確認されるのは縄文時代後期以降である。加古川左岸では、宮山遺跡（八幡町上西条）で晩期の建物跡などが発見され（註2）、坂元遺跡（野口町坂元）で晩期の埋甕土坑が確認されている（渡辺2009）。加古川右岸では、岸東遺跡に西接する岸遺跡（7）、沖積低地上の砂部遺跡（9）で縄文時代晩期の土器と弥生時代前期の土器が出土していることから、縄文時代から弥生時代への過渡期に営まれた集落として注目される。このほか、播磨灘沿岸部で明確に確認される唯一の貝塚遺跡である日笠山貝塚（高砂市曾根町南山）では、前期後半から晩期にかけての土器や屈葬された男性人骨が出土している（間壁2007）。

弥生時代 弥生時代に入ると、確認される集落数が激増し、加古川兩岸の沖積低地を中心に全時期を通して遺跡が営まれるようになる。左岸の大規模集落である溝之口遺跡（10）、美乃利遺跡（218）に対して右岸では、縄文時代晩期から続く砂部遺跡、隣接する東神吉遺跡（8）の一体的な集落が拠点として挙げられる。この2遺跡を中心として沖積低地や低位段丘上に中・小規模の集落が複数形成され、加古川右岸の弥生集落群を形成していたとみられる。岸東遺跡の周辺では、岸遺跡において縄文時代晩期から引き続いて前期から後期にかけての土器が出土しているが、遺物包含層のみの確認であるため集落様相は明らかではない（加古川市教委1961）。

集落が活発に営まれるとともに、西条52号墓（西条山手二丁目）、神吉山5号墓（205）など後期・終末期の墳丘墓や、左岸のいなみの台地縁辺に存在する望塚（八幡町上西条）では扁平鈕式銅鐸が発見されている。

古墳時代 古墳時代は、弥生時代と比較すると集落遺跡の発見例や調査例が少ないといえる。そのようななかで、加古川右岸における弥生時代の拠点集落であった砂部遺跡・東神吉遺跡では、規模は縮小するものの集落域として引き続き利用されていたようである。特に砂部遺跡では、溝状遺構から石製模造品やガラス小玉などの祭祀用品、韓式系土器が出土しており、韓半島と密接な関係を持った人々の居住地と考えられている。

事例の少ない居住域に対して古墳は多数確認されており、前期から後期、終末期にかけて山地や段丘上を中心に分布している。右岸で調査が進んでいる古墳群としては、現在の平荘湖ダム周辺に位置する平荘湖古墳群が挙げられる。大きく6つの支群に分かれ、後期・終末期を中心とする68基の古墳が確認されているが、新田開発に伴って多くの古墳が破壊されたとみられ、本来は100基を超える加古川下流域最大規模の古墳群であったとされる。これらに先行して同地域に築造された中期の池尻2号墳（44）、カンス塚古墳（45）は、韓式系土器とともに馬具や金製耳飾などの渡来系遺物が副葬されていたことから、前述した砂部遺跡との関係性が注目される。岸東遺跡の周辺では、辻古墳群（211、



図5 周辺の遺跡

表1 周辺の遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	時代	遺跡番号	遺跡名	時代	遺跡番号	遺跡名	時代
3	新櫃池遺跡	旧石器	232	宮前大池埴輪窯跡	古墳	636	大野遺跡	平安～中世
6	宮前大池遺跡	縄文	251	中津構居跡	中世	653	西河原遺跡	奈良～中世
7	岸遺跡	縄文～弥生	256	神吉城跡	中世	657	平津遺跡	弥生～平安
8	東神吉遺跡	弥生～古墳	257	砂部構居跡	中世	高1～5	西坂遺跡A～E地点	平安
9	砂部遺跡	縄文～奈良	263	加古川城跡	中世	高6・7	寺尾1・2号窯	平安
10	溝之口遺跡	弥生～平安	276	平津構居跡	中世	高16	香呂山遺跡	平安～中世
11	平山遺跡	弥生	277	池尻18号墳	古墳	高17	皿池ノ上遺跡	縄文～中世
13	中西台地遺跡	弥生～中世	280・281	辻2・3号墳	古墳	高38	一本松・北原遺跡	縄文～中世
14	中西低地遺跡	弥生～中世	299～303	池尻55～59号墳	古墳	高39	鴻池遺跡A地点	旧石器
15	神吉遺跡	弥生	308	西山新池遺跡	旧石器	高40	鴻池遺跡B地点	古墳～中世
21	神吉山遺跡	弥生	313	横大路遺跡	縄文	高41	鴻池遺跡C地点	平安～中世
44	池尻2号墳	古墳	314	峠の池遺跡	縄文	高44・45	魚橋1・2号墳	古墳
45	カンス塚古墳	古墳	326	峠東遺跡	弥生	高46	神爪遺跡A地点	平安
126～131	飯盛山1～6号墳	古墳	327	峠の池南遺跡	弥生～平安	高47	神爪遺跡B地点	縄文～中世
137～139	平山1～3号墳	古墳	333	平山4号墳	古墳	高61	中筋遺跡A地点	弥生～中世
140～151	池尻3～14号墳	古墳	341	山越古墳	古墳	高62	中筋遺跡B地点	中世
152	升田山15号墳	古墳	344	西山大塚古墳	古墳	高63	魚橋遺跡A地点	旧石器～中世
153・154	池尻16・17号墳	古墳	345	横大路古墳	古墳	高64	魚橋遺跡B地点	古墳～中世
155～164	池尻19～28号墳	古墳	346	穴蔵古墳	古墳	高65	魚橋遺跡C地点	平安～中世
165～189	池尻30～54号墳	古墳	365	かや池遺跡	奈良	高66・67	伊保山遺跡A・B地点	古墳
190～199	升田山1～10号墳	古墳	459	横山遺跡	縄文	高68	伊保遺跡	古墳～中世
200	天下原古墳	古墳	478	佐伯寺跡	平安	高71	伊保山古窯跡	近世
201～204	神吉山1～4号墳	古墳	514	岸東遺跡	中世	高72～75	竜山1～4号墳	古墳
205	神吉山5号墓	弥生	515	岸南遺跡	弥生	高76	天磐船旧所在地	古墳
207～209	宮山1～3号墳	古墳	518・519	升田山11・12号墳	古墳	高78	魚橋古窯跡	中世
210	宮前古墳	古墳	520	横大路古墳	中世	高79	石の宝殿	古墳
211	辻古墳	古墳	528	松岡青羅墓	近世	高80・81	竜山5・6号墳	古墳
218	美乃利遺跡	弥生～中世	532	大國山遺跡 (辻中世墓)	中世	高82	竜山遺跡	旧石器～縄文
219	升田遺跡	奈良	554	黒岩山古墳	古墳	高83	魚崎遺跡	中世
221	神吉南遺跡	弥生～奈良	560	西村遺跡	弥生～奈良	高84	米田遺跡	弥生～室町
222	天下原遺跡	弥生～奈良	607・608	升田山13・14号墳	古墳	高94	竜山採石遺跡	古墳～近世
224	溝之口廃寺	奈良	610	北谷遺跡	弥生～中世	高95	竜山7号墳	古墳
228	中西廃寺	奈良						

※「高」は高砂市の遺跡

280・281)、宮山古墳群(207～209)などの小規模古墳群が山地の尾根上に点在する傾向にある。これらの古墳の多くは未調査もしくは既に消滅しており造営時期が明らかでないが、岸東遺跡の南西に位置する竜山古墳群(高72～75、80、81、95)については詳細な調査がなされており、竜山の採石に携わる石工集団との関連が指摘されている(岡崎2011)。

また、生産遺跡としては竜山採石遺跡(高94)が古墳時代から現代に至るまで竜山石の採石場として機能しており、前期古墳の石材産出から始まる各時代の採石遺構や関連遺構が確認されている(清水2014)。

奈良・平安時代 『増訂印南郡誌』によると、岸東遺跡の位置する西神吉町岸周辺は『播磨国風土記』における「印南郡大国里」に比定できるとされる。平安時代中期の『和名類聚抄』でも「大国(於保久爾)郷」という郷名が見られ、奈良時代の大国里を引き継いだものと考えられている。

律令体制下における特徴的な遺跡として、岸東遺跡の位置する低位段丘上に中西廃寺(228)がある。出土した古代瓦や現在の薬師堂敷地内に残る塔心礎などから、飛鳥時代に創建され少なくとも平安時代後期までは存続した寺院と想定されている。塔の九輪の部材とされる石製露盤及び刹は「石井の清水」として江戸時代頃までに井戸枠に転用され現在に遺っている(註3)。また、中西廃寺の東に接する中西台地遺跡では、軒平瓦などの寺院関連遺物が出土している(深江2003)。

古代の集落遺跡としては、左岸では沖積低地上の溝之口遺跡、美乃利遺跡などが存続するのに対し、右岸では明確な遺構を伴う集落が減少するが、低位段丘上の北谷遺跡(610)、中西台地遺跡などで一定量の出土遺物がみられる。特に平安時代においては多量の出土例から集落様相を窺うことができ、神爪遺跡B地点では、平安時代後半から鎌倉時代にかけての土器が多量に出土し、周辺窯跡や土器生産者に関連する集落と考えられている(間壁2007)。また、竜山よりやや北西に位置する塩田遺跡(高砂市曾根町塩田)では、平安時代前半頃の墨書土器や円面硯が含まれる土器群が発見されていることから、官衙的施設あるいは郡津などの可能性が指摘されている(間壁2007)。

中世 平安時代の「大国郷」を引き継ぐ荘園は、『後宇多院御領目録』に「大国荘」の名称が確認できるが(兵庫県教委1982)、岸東遺跡の周辺地域がこの荘園領土に属していたかどうかは不明である。鎌倉時代には加古川城跡(263)の位置に播磨守護所が置かれたとされ、周辺は播磨国の中心部として機能していた可能性が考えられる。

この時期の遺跡は文献資料に拠る把握が多く、文献に登場することが稀な集落などの発見例は少ないといえる。左岸の完新世段丘上に位置する大野遺跡(636)では、平安時代後半と鎌倉時代後半から室町時代前半までの2時期に分かれる集落遺構が検出されている。特に中世では、方形区画内に掘立柱建物と土坑で構成される屋敷地が確認され、丹波焼など各地で生産された焼き物が多く出土したことから、旧加古川に近接する地形を利用した舟運が行われていた可能性が指摘されている(山田・中川2010)。

岸東遺跡周辺では、中西台地遺跡で戦国時代の方形居館跡が確認されている(深江2003)。奈良・平安時代の集落で引き続き中世遺物が確認される例は多く、中西台地遺跡のほか、中西低地遺跡(14)、神爪遺跡B地点、塩田遺跡、米田遺跡(高84)などが該当する。集落跡以外では、岸東遺跡から法華山谷川を隔てた北側に位置する大国山遺跡(532)で備前焼壺などの蔵骨器を納めた中世墓が4基確認されており、墓を造営した一族の居館の存在が近隣に想定されている(別府1991)。

『播州古城記』をはじめとした古記録に登場する城館は数多く、その大半は南北朝時代以降に増加する戦に備えて築かれたものである。現在の東神吉町常楽寺に位置する神吉城(256)は室町時代に

築かれた城で、惣構えの規模を有する大城郭であったとされ（兵庫県教委 1982）、神吉頼定が第8代城主であった天正6（1578）年の三木合戦の際に落城するまで存在した。竜山山頂に位置する魚崎遺跡（高83）は、嘉吉元（1441）年時点で和田兵庫介綱忠が城主であったとされる構居である。櫛橋氏が治める志方城（志方町志方町）の属城とみられており、三木合戦の敗北によって神吉城と同じく天正6年に放棄されている（北垣 1981）。そのほか、天正年間に存在したとされる砂部構居（257）、室町時代頃の築造とされる平津構居（276）が知られる。また、『加古川市遺跡分布地図』に記載がない城館として、西神吉町大国付近に的場城、西神吉町中西付近に殿後城、岸東遺跡の南付近に西出口城、鎌倉時代頃の築造とされる米田構居が高砂市米田町米田に比定されているが、城館の詳細や推定地は明らかでない。

中世における加古川地域の特徴として、石造文化財が豊富に遺る点が挙げられる。竜山をはじめとした加古川右岸の山地が凝灰岩（竜山石）の産出地であることが主な要因であり、これらの分布は枚挙に暇がない。特に、古墳の石棺に仏像を彫り込んだ石棺石仏は加古川・加西地域の石造文化として顕著である。岸東遺跡の周辺には、正岸寺の石棺仏（西神吉町岸）、大国墓地の石棺仏（西神吉町大国）、常福寺の石棺仏2基（西神吉町大国）などがあり、いずれも南北朝時代から室町時代頃に造られたと考えられている。

近世以降 江戸時代に入ると加古川地域一帯は姫路藩領に組み込まれる。東西を西国街道（中国路）が横断し、川の横断は随所で設けられた渡し船が使用されていた。加古川には高瀬舟が運航され、南北における物資輸送の役割を担っていた。現在の加古川町寺家町付近には西国街道の宿場町として加古川宿が置かれ、交通の要衝として栄えたとされている。明和元（1764）年頃の西国街道のルートを示した『中国行程記』（橋川 2004）の絵図には、街道の北側に「岸村」「中西」「大国」の地名と各村落の表現が見られ、西神吉町周辺では低位段丘の南側に沿うように街道が通っていた様子が認められる。

埋蔵文化財調査によって近世以降の遺跡を把握した例は加古川市域では数少ない。竜山採石遺跡では近代に至るまで姫路藩の下で採掘を行っており（清水 2014）、遺構に限らず文献資料なども含め幕藩体制下の石材生産を知るうえで重要な遺跡となっている。

註1）過去に計画された開発は、発掘届出の提出後に中止となっている。

註2）八幡町上西条に位置する宮山遺跡については、昭和40年代に発掘調査が実施されている。縄文時代晩期の敷石住居跡や祭祀跡が発見されたとあるが詳細は不明である（加古川市教委 1970）。

註3）市指定文化財「石井の清水」は『播州名所巡覧図絵』で紹介されており、19世紀初め頃には既に名所として認知されていたようである。現在は使用されていないが、地元住民に親しまれ適切に管理されている。

第Ⅱ章 調査成果

第1節 既往の調査と調査概要

既往の調査 岸東遺跡では、開発に伴う確認調査が過去に幾度か実施されているが、調査によって明確な遺構・遺物を確認した例は、今回調査地内で令和元（2019）年度に実施された確認調査のみである。調査では複数のピット、土坑、溝、性格不明遺構が検出され、遺物包含層や遺構に伴って中世の土師器・須恵器片が出土した。「第Ⅰ章第2節 調査に至る経緯と経過」で前述したとおり、当遺跡は中世の城館跡として把握されていたが、古記録や実際の調査に基づくものではなかったため、この確認調査で遺跡自体の存在を再確認したといえる。

調査成果の詳細については、『加古川市文化財年報 第5号 令和元（2019）年度』に掲載した「調査報告1 岸城跡 確認調査報告」を参照されたい（加古川市教委 2022b）。

調査概要 今回の調査では、工事で破壊されてしまう503㎡を対象に発掘調査を実施した結果、中世を中心とする遺構・遺物を確認した。遺構は、合計38基検出した（図6）。内訳は、掘立柱建物跡（SB）3棟、柱穴列（SA）1列、井戸（SE）1基、土坑（SK）9基、ピット（SP）19基、溝（SD）5条である。遺物は、中世の土師器・須恵器を中心に遺物収納コンテナ1箱分が出土した。集落遺跡としては非常に少ない出土量で残存状況も悪いものの、図化及び復元が可能なものを選定し合計18点の土器・陶磁器を掲載している。

第2節 基本層序

調査地はこれまで畑地として利用されてきた土地であり、現在は敷地全体が住宅地に囲まれている。現地表面はほぼ平坦で標高7.9～8.1mを測り、南に向かって全体にやや傾斜している。調査地の南側と南西側は、敷地を境として崖状に落ち込む地形となっており、調査地は隣接する宅地及び道路面から1m程度高くなっている。また、調査区の西側と北側付近にはかつて池が存在し、近年になって埋め立てられたという。調査ではこれらの池が地表面から0.2mほど下で検出され、両池の埋土には土嚢袋などの現代廃棄物が多く含まれていた。

池を除いた調査地の基本層序は、大きく分類して3段階（Ⅰ～Ⅲ層）の堆積により成り立っている（図7）。第Ⅰ層は、整地土や耕作土・床土からなる表土層である。第Ⅱ層は、耕作土以下の二次堆積層で、中世を中心とする遺物包含層である。しまりの良い黄褐色系のシルトを主体とし、凡そ0.15～0.20m程度の厚みをもって調査区全域に堆積している。第Ⅲ層は、いわゆる「地山」と呼ばれる自然堆積層である。地山上面の標高は7.40～7.45mとほぼ平らであり、暗灰黄色シルト混じり粘質シルト（Ⅲ-1層）、明黄褐色極細砂混じりシルト（Ⅲ-2層）が調査区全域に安定して堆積している。これより下位では、標高6.7m以下で粘質シルトの堆積（Ⅲ-3層）を確認した。

遺構の殆どは地山である第Ⅲ-1層の上面で検出されたが、壁面観察では遺物包含層である第Ⅱ層から掘り込まれたピット状の遺構が認められるため、本来は2時期の遺構面が存在するものとみられる。ただ、掘込み面である第Ⅱ層は中世を中心とした遺物包含層であるため、中世以前には遡らない比較的新しい時期の遺構面であると考えられる。

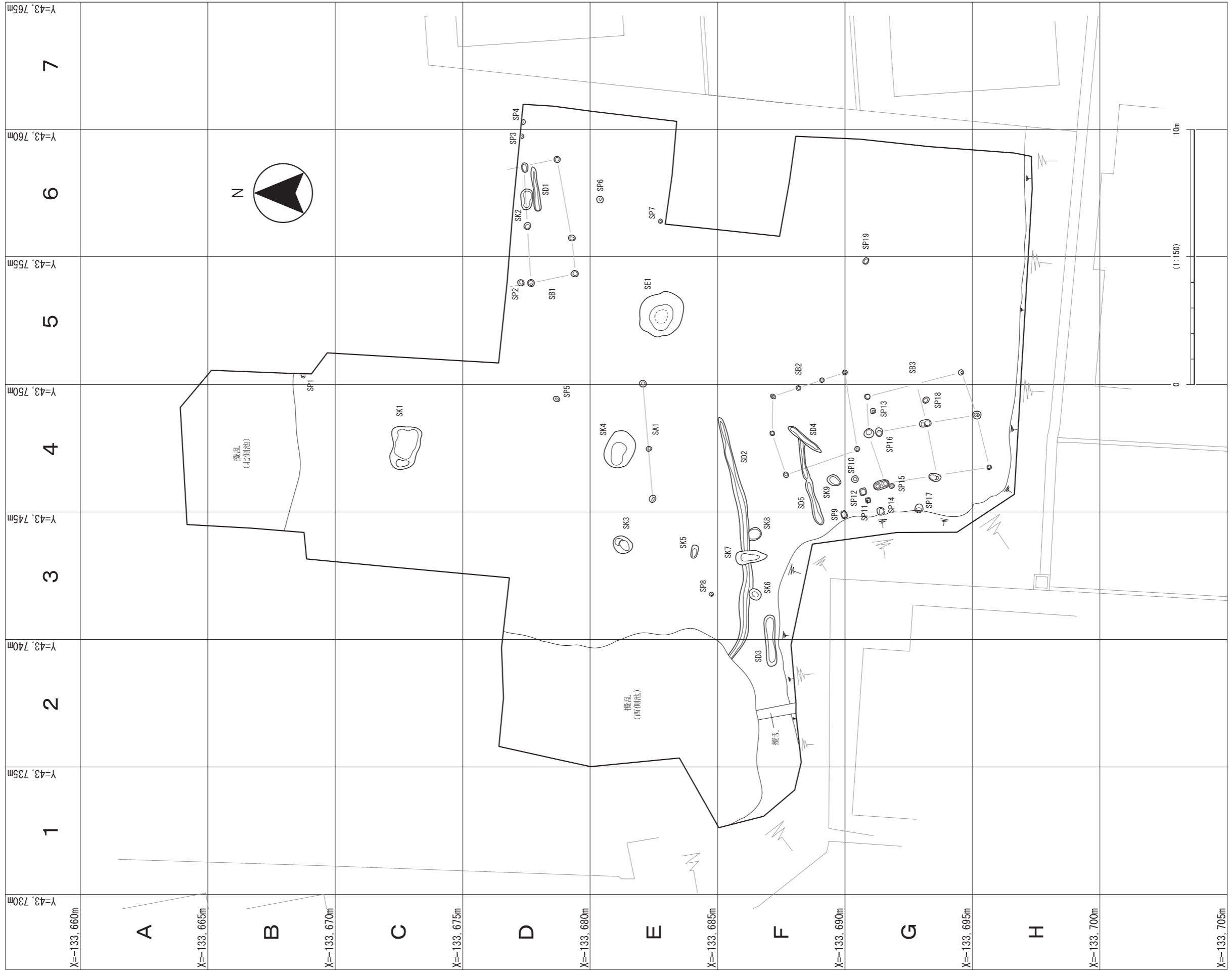
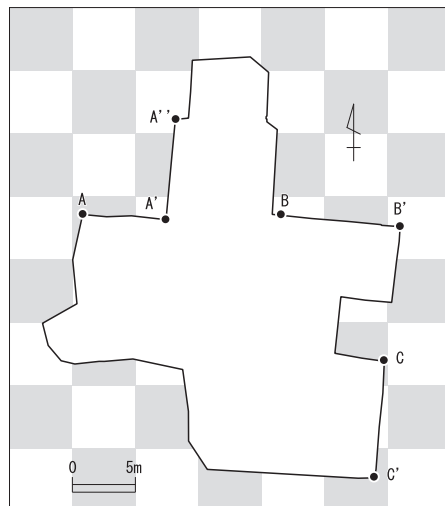
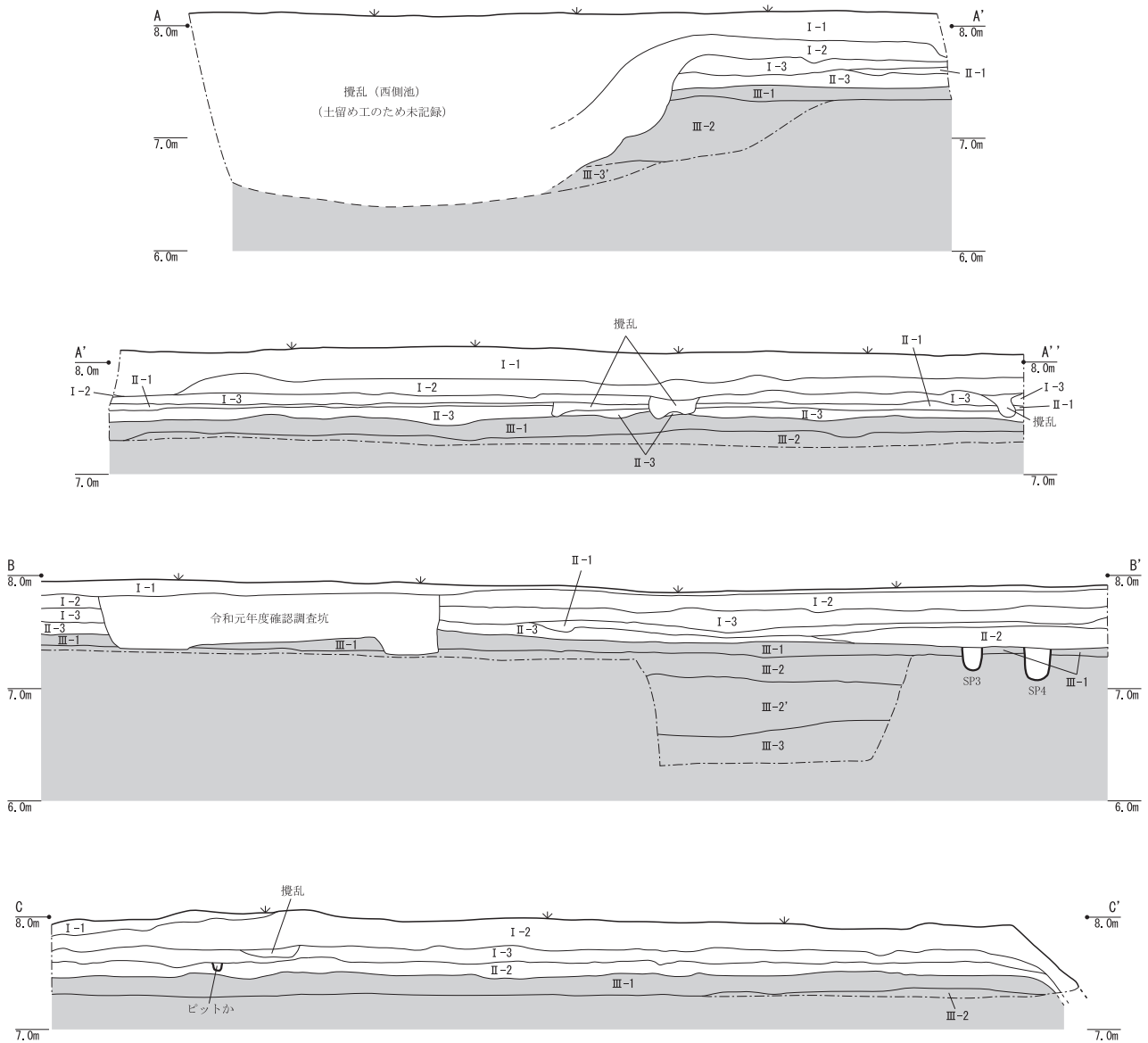


図6 遺構配置図



- I-1 (碎石層)
- I-2 (表土・耕作土)
- I-3 (床土)
- II-1 10YR5/8 黄褐色シルト (遺物包含層)
- II-2 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト (遺物包含層)
- II-3 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト (遺物包含層)
- III-1 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト混じり粘質シルト (地山)
- III-2 10YR6/8 明黄褐色極細砂混じりシルト 亀裂痕あり (地山)
- III-2' 10YR7/2 にぶい黄褐色極細砂混じりシルト (地山)
- III-3 2.5Y7/3 浅黄色粘質シルト (地山)
- III-3' 10YR8/2 灰黄色粘質シルト (地山)

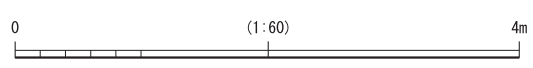


図7 基本層序

第3節 遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡 (SB)

■ SB1 (図8、写真5～9)

位置：D5・6グリッドに位置する。調査では6基の柱穴 (P1～P6) を検出し、建物の北側は調査区外に及んでいる。遺構確認面の標高は7.2～7.4 mで、遺構底面の標高は6.9～7.0 mである。西側に並ぶ柱穴を基準とした建物方位はN-12°-Wを示す。

形態：桁行2間以上、梁行2間の建物跡と考えられる。各柱穴の平面形は円形が殆どで、P3のみ楕円形である。断面形はおおむねU字状と凹字状があり、P4・5は柱痕跡が確認できる。

規模：各柱穴の中心を基準とした柱間はばらつきがあり、1.30～3.15 mを測る。各柱穴の規模は長軸0.26～0.38 m、短軸0.24～0.27 m、深さ0.18～0.36 mを測る。

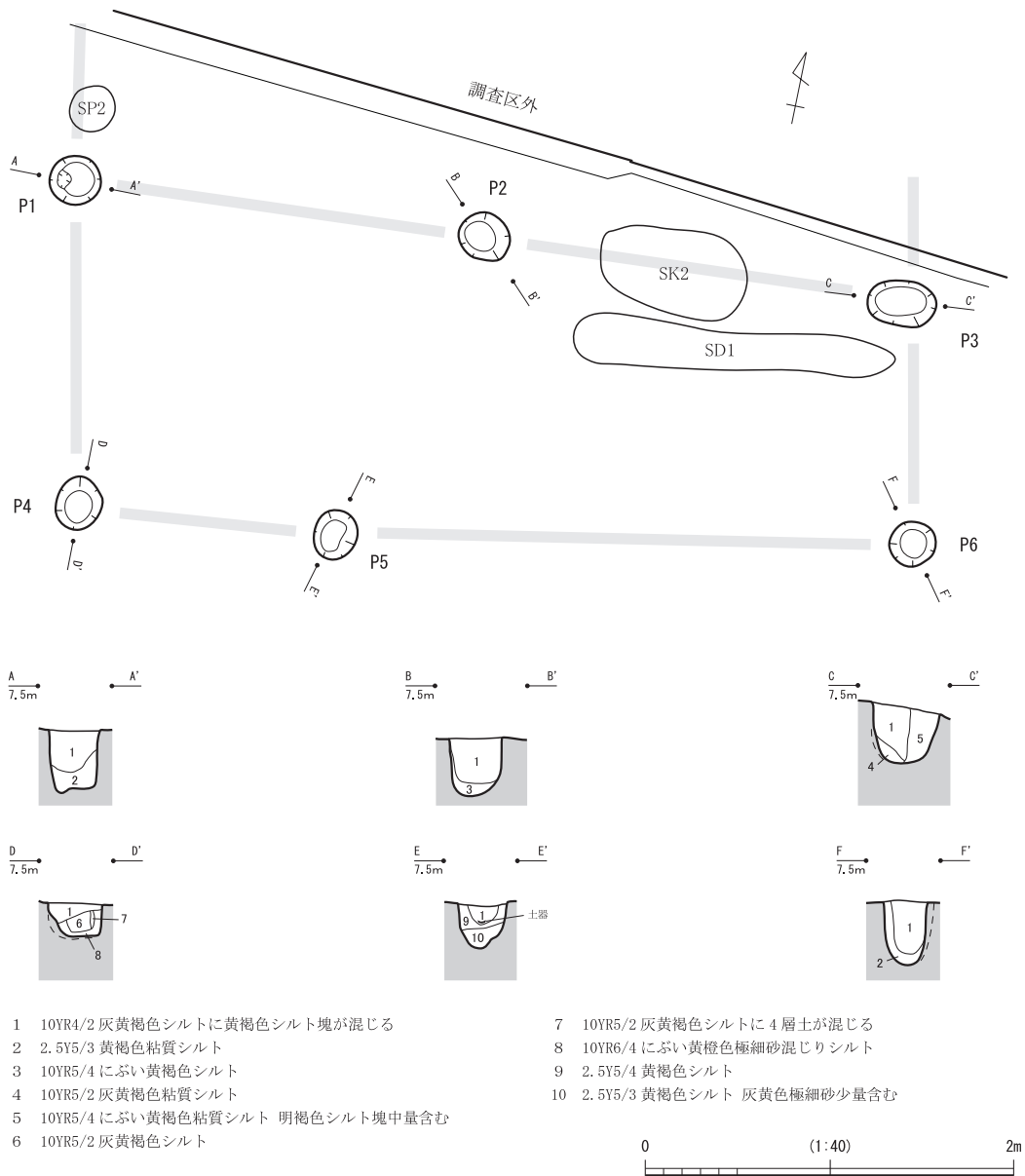


図8 掘立柱建物跡 (SB) 1

土層：埋土は灰黄褐色シルト及び地山ブロックとみられる黄褐色シルトを主体とする。
 出土遺物：P3・4から土師器細片が微量、P5から土師器皿の細片が少量出土した。
 遺構時期：出土遺物の胎土・特徴から中世頃とみられるが、詳細な時期は不明である。

■ SB2 (図9、写真4・10～14)

位置：F4・5、G4・5グリッドに位置する。7基の柱穴（P1～P7）を検出した。遺構確認面の標高は7.40～7.47 mで、遺構底面の標高は7.22～7.38 mである。東側桁行を基準とした建物方位はN-19°-Wを示す。

形態：桁行3間、梁行2間の側柱建物とみられる。平面形は西側に傾く平行四辺形を呈し、北側梁行の中心の柱位置が外側にやや張り出している。西側桁行及び南側梁行の柱穴は検出されなかった。各柱穴の平面形はほぼ円形を呈する。断面形は概ねなだらかなU字状を呈する。全ての柱穴に柱根あるいは柱材片が残っており、柱根はいずれも被熱により炭化した状態であった。

規模：各柱根を基準とした柱間は東西1.45～1.70 m、南北0.95～1.05 mを測り、床面積は9.24 m²となる。各柱穴の規模は長軸0.18～0.23 m、短軸0.17～0.21 m、深さ0.08～0.22 mを測る。

土層：埋土は黄褐色シルトを主体とし、腐食した柱材の痕跡が多く混入する。

出土遺物：P2から土師器細片が微量出土した。

遺構時期：出土遺物からの時期の推定は困難である。

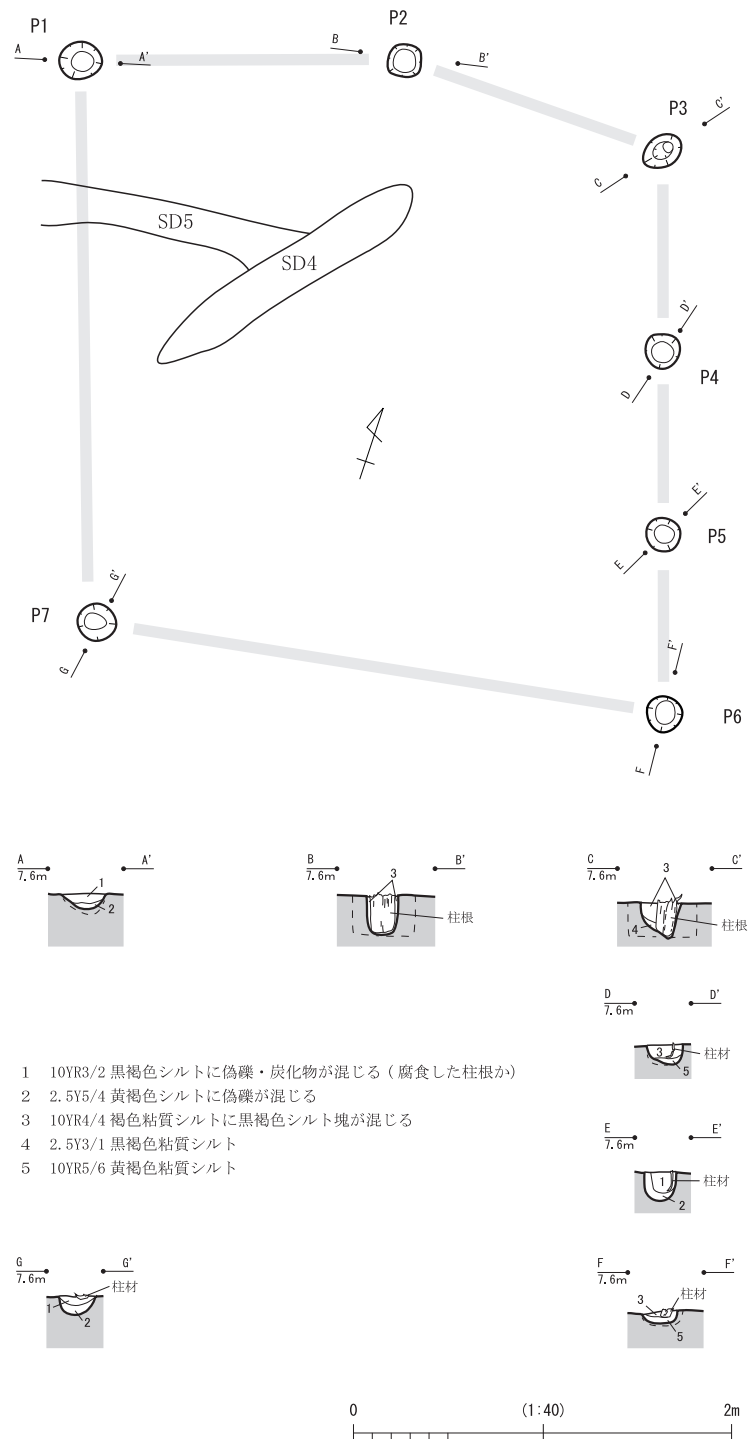


図9 掘立柱建物跡 (SB) 2

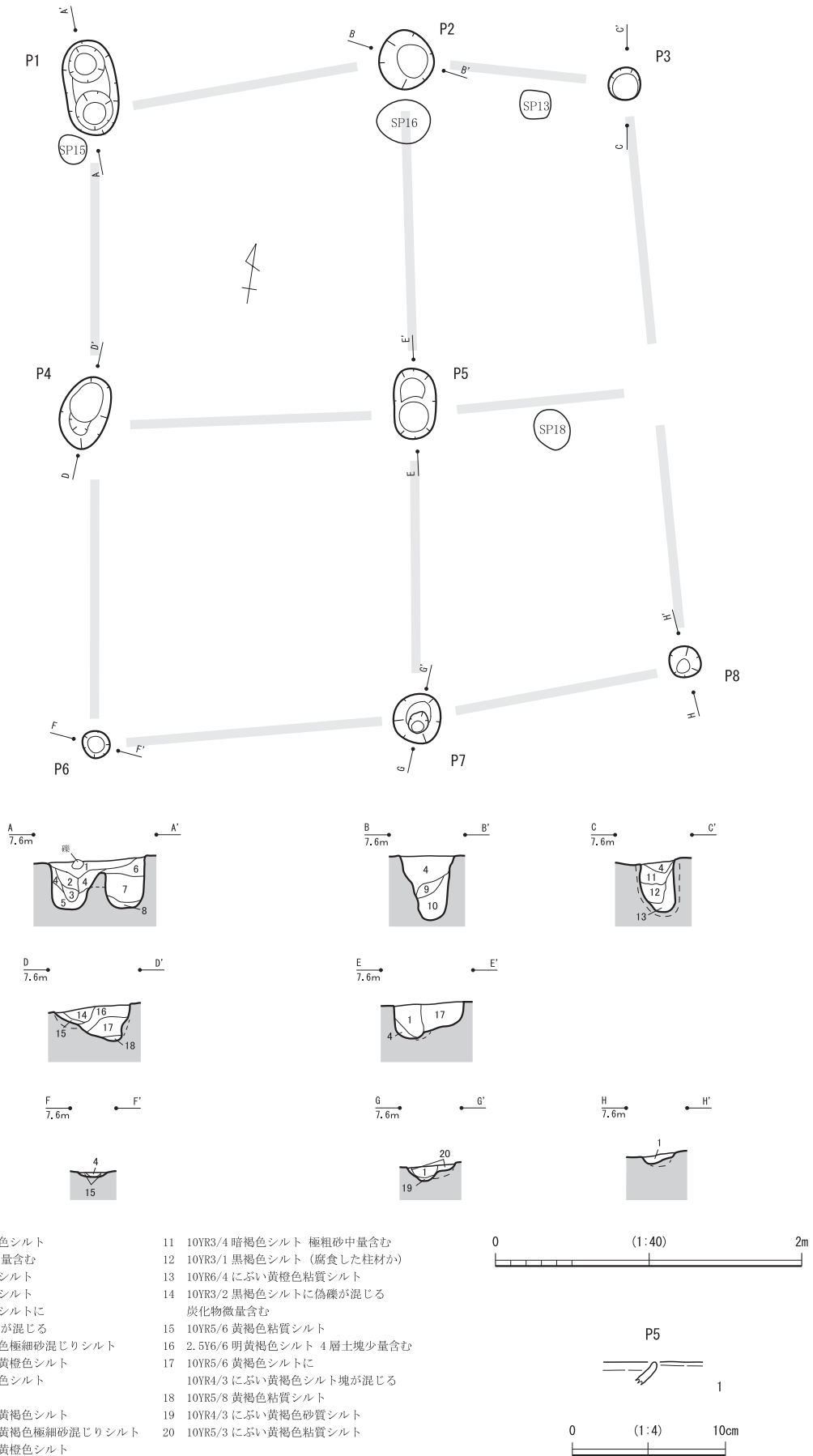


図 10 掘立柱建物跡 (SB) 3

■ SB3 (図10、表5、写真15～20・60)

位置：G4・5、H4グリッドに位置する。8基の柱穴(P1～P8)を検出した。遺構確認面の標高は7.20～7.46 mで、遺構底面の標高は7.00～7.22 mである。西側に並ぶ柱穴を基準とした建物方位はN-10°-Wを示す。

形態：桁行2間、梁行2間の総柱建物であるが、東側中央の柱穴は検出されなかった。平面形は一辺約4 mを測る方形に近いものの、北側中央の柱穴が外側に張り出すなど、全体はやや歪んでいる。各柱穴の平面形は円形又は楕円形を呈し、断面形は不整形なものが多い。

規模：各柱穴の中心を基準とした柱間は、東西1.45～2.15 m、南北2.0～2.3 mを測り、東側の柱間が西側に比べてやや短い。床面積は14.4㎡である。各柱穴の規模は長軸0.19～0.49 m、短軸0.19～0.37 mとばらつきがある。深さは0.05～0.44 mを測り、南へいくにつれ浅くなっているが、遺構底面の標高は7.1 m前後と安定しているため、本来は全て北側梁行と同程度の高さから掘り込まれているものと考えられる。

土層：埋土は、灰黄褐色シルトと地山ブロックとみられる黄褐色シルトを中心とする。P3では腐食した柱材の痕跡が確認されている。

出土遺物：P2上層から土師器皿又は杯(1)が、P1・P4から土師器鍋などの細片が微量出土した。

1は口縁のみで、軟質で浅黄橙色を呈する。端部は丸く肥厚し先端で僅かに内湾する。

遺構時期：出土遺物の胎土や特徴から中世頃とみられるが、詳細な時期は不明である。

(2) 柱穴列(SA)

■ SA1 (図11、写真21～23)

位置：E4・5グリッドに位置する。3基の柱穴を検出した。遺構確認面の標高は7.40 mで、遺構底面の標高は7.15 m前後である。柱穴の並ぶ方位はN-85°-Eを示す。

形態：各柱穴の平面形はほぼ円形で、断面形はU字状を呈する。すべての柱穴で柱痕跡を確認した。柱穴の規模や柱間距離、主軸方位のあり方は各掘立柱建物跡と類似するものの、桁行に対応する柱穴が確認されなかったことから柱穴列と分類している。

規模：柱痕跡を基準とした柱間は2.0～2.6 mで、全長は4.6 mである。各柱穴の規模は長軸0.24～0.30 m、短軸0.20～0.26 m、深さ0.15～0.27 mを測る。

土層：灰黄褐色シルト及び黄褐色シルトを主体とする。

出土遺物：P3から土師器細片が微量出土した。

遺構時期：出土遺物からの時期の推定は困難である。

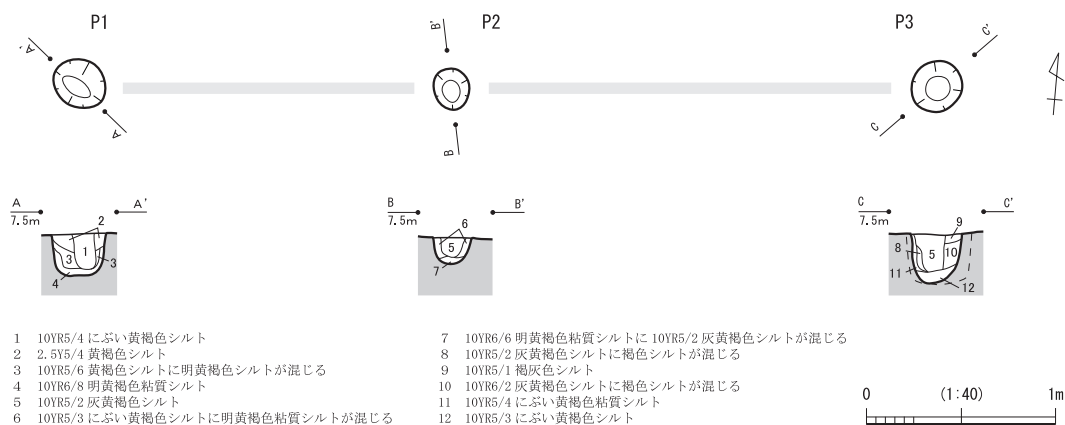


図11 柱穴列(SA) 1

(3) 井戸 (SE)

■ SE1 (図12、表5、写真24～27・60)

位置：E5グリッドに位置する。本来の遺構確認面となる地山上面（標高7.4 m）では掘方の上層に攪乱土が埋まっている様子が見られ、標高6.7 mで初めて遺構として認識された。

形態：平面形はやや楕円を呈する不整円形である。断面形は逆ハの字である。井戸側とみられるような痕跡や付属施設は確認されず、素掘りの井戸と考えられる。

規模：長軸1.85 m、短軸1.70 mである。深さは、遺構確認面から2.55 m地点まで確認したが、安全を考慮して掘削を中止したため底面の確認には至らなかった。

土層：上層は灰黄褐色シルトや地山ブロックを主体としたレンズ状堆積で、砂質・粘質シルトブロックが多く混入する。下層はしまりの悪い黄褐色シルトを主体とする。

出土遺物：上層から施釉陶器皿（2）、土師器細片が各1点出土した。

2は、珉平焼の小判形皿である。見込みに龍文を配した型作り成形後に外面のみナデによる整形を施す。口縁端部の内側にやや凹む段を有する。施釉は緑釉とみられ淡黄色を呈する。

遺構時期：遺構の掘削時期は不明であるが、出土遺物の特徴から、幕末から明治時代前半頃に埋没したものとみられる。

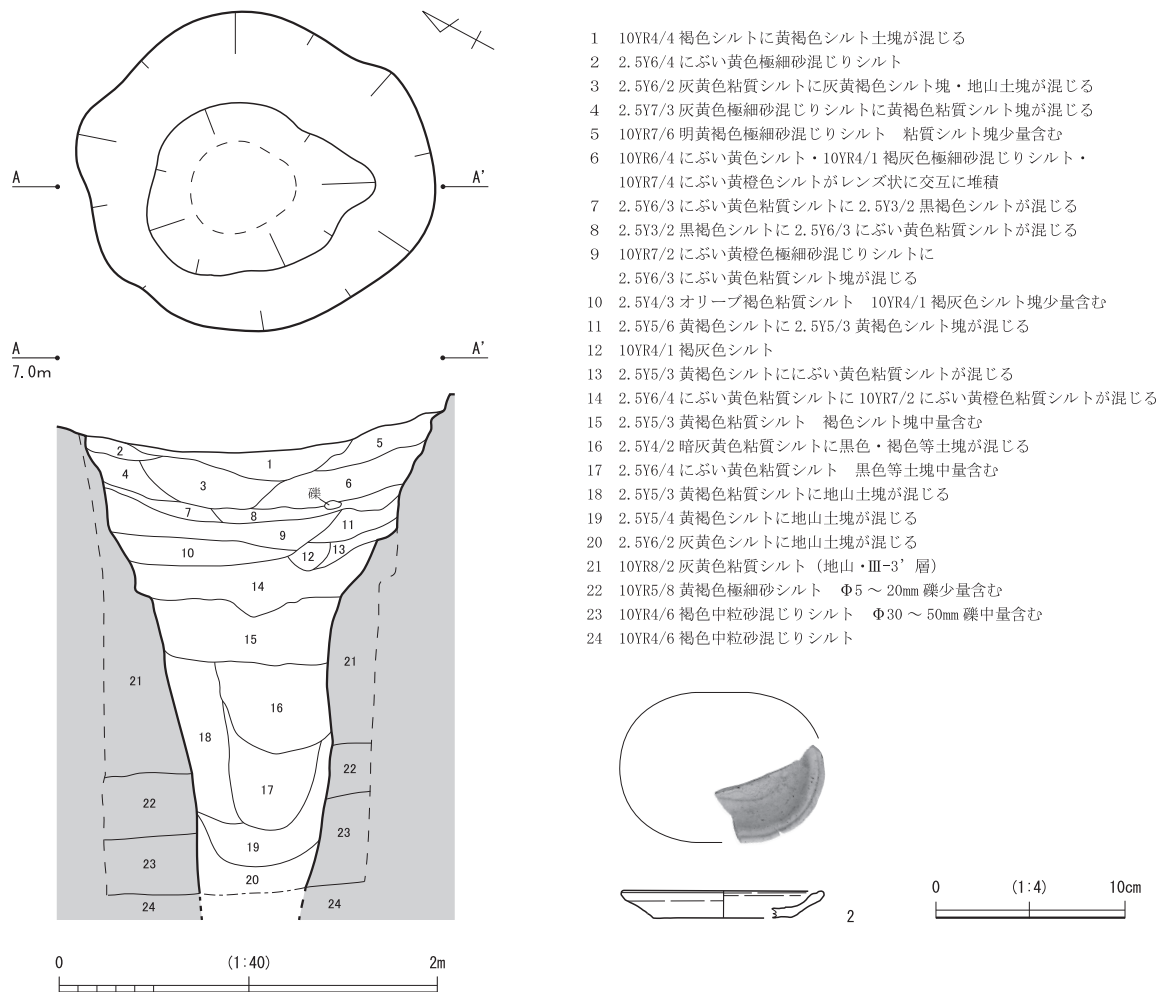
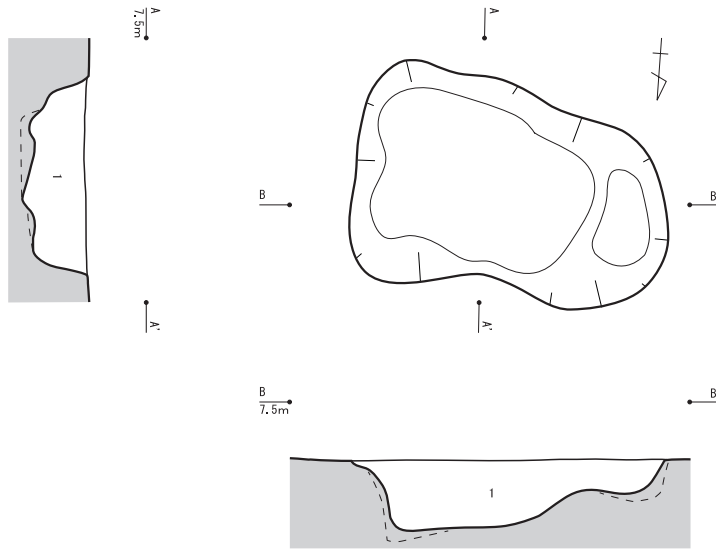


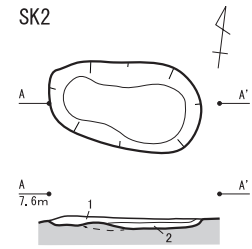
図12 井戸 (SE) 1

SK1



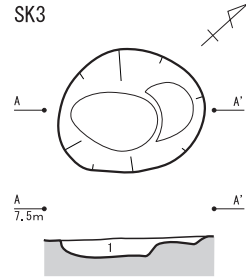
1 10YR7/2 にぶい黄橙色極細砂まじりシルトに
10YR5/6 黄褐色極細砂が混じる

SK2



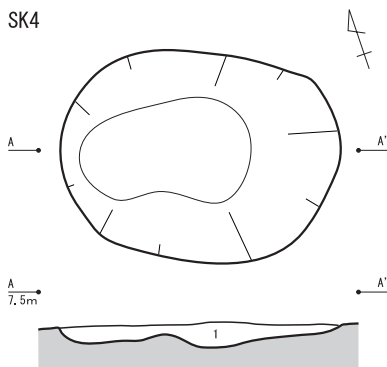
1 10YR4/4 褐色シルト
2 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトに
10YR4/4 褐色シルトが混じる

SK3



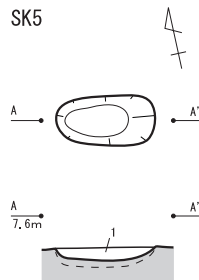
1 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトに
明黄褐色シルトが混じる

SK4



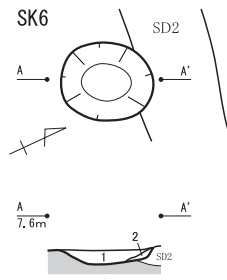
1 10YR7/2 にぶい黄橙色シルト
鉄分粒中量含む

SK5



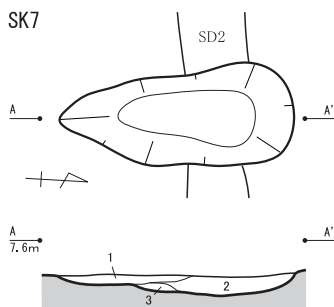
1 10YR5/2 灰黄褐色シルト
鉄分粒中量含む

SK6



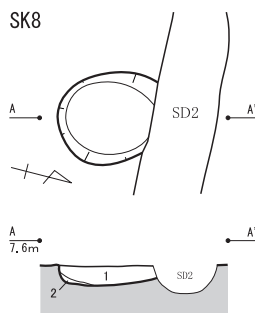
1 10YR7/3 にぶい黄橙色砂質シルト
2 10YR5/6 褐色シルト

SK7



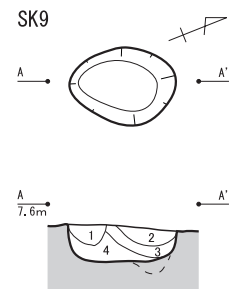
1 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト
鉄分粒中量含む
2 10YR4/6 褐色シルト混じり極細砂
3 10YR5/6 黄褐色シルト※粘性あり

SK8



1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトに
10YR5/8 黄褐色シルト塊が混じる
2 10YR5/8 黄褐色粘質シルト

SK9



1 10YR6/2 灰黄褐色シルト
2 10YR5/6 黄褐色シルト
3 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト
4 10YR6/4 にぶい黄褐色シルトに
10YR5/6 黄褐色粘質シルトが混じる

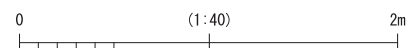


図13 土坑 (SK) 1～9

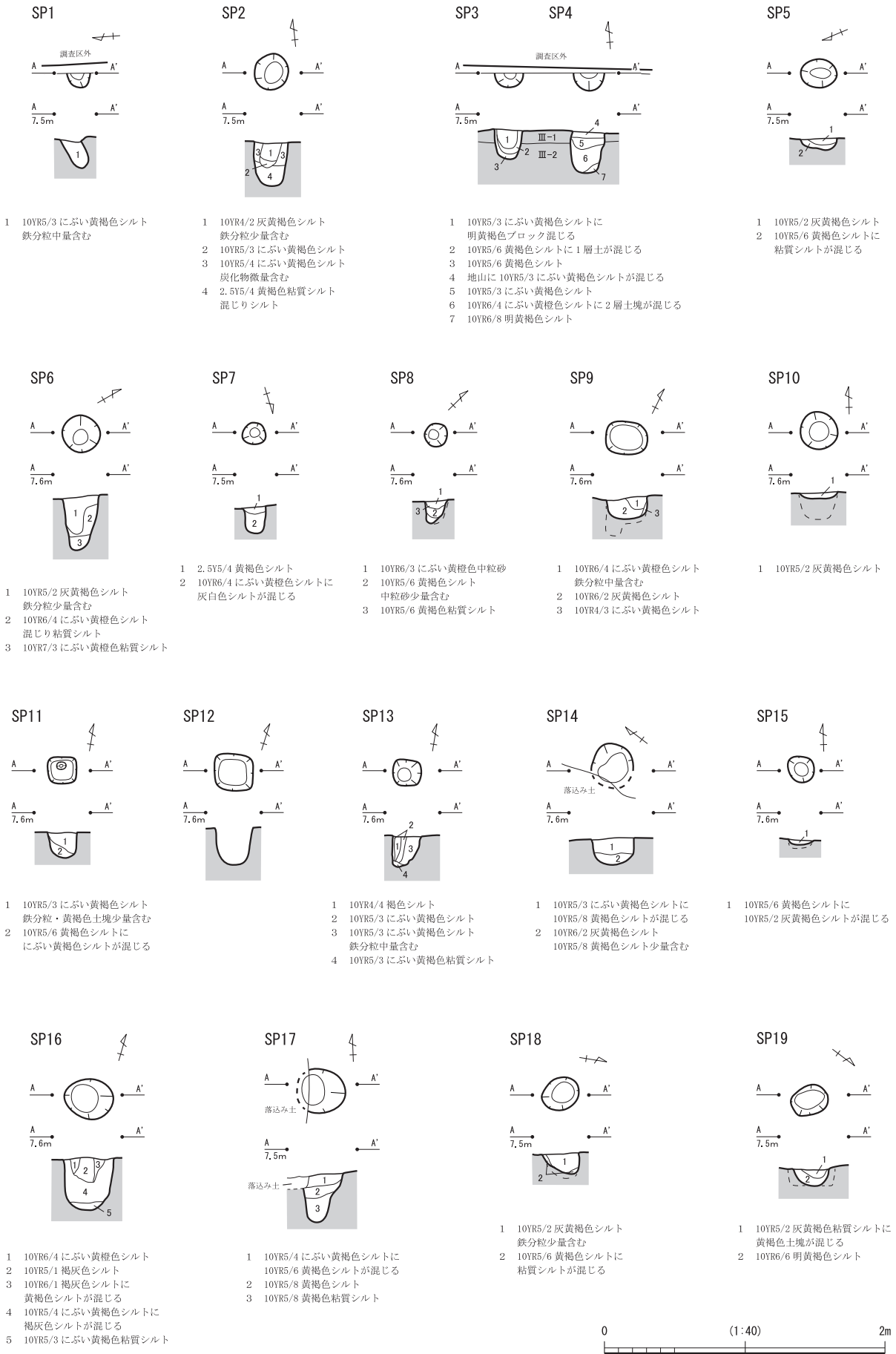


図14 ピット (SP) 1～19

(4) 土坑 (SK)・ピット (SP) (図13～15、表2・3・5、写真28～49・60)

掘立柱建物を構成する柱穴以外の土坑・ピットの分類にあたっては、検出段階の平面規模が長軸0.5m以上を測るものを土坑、0.5m未満を測るものをピットとし、土坑を9基、ピットを19基検出した。

土坑は、平面形は楕円や不整形を呈し、断面形は浅い皿状や凹凸のある不整形を呈するものが殆どであり、土層は単層もしくは2・3層の単純な堆積で黄褐色シルトを主体とするものが多い。土層堆積状況や出土遺物から遺構の性格を特定できるものはない。ピットは、平面形は円形、楕円形、隅丸方形があるが円形が殆どである。断面形はU字状又は凹字状が多く、柱痕跡を有することから本来は掘立柱建物や柱穴列などを構成するであろうピットも複数見られる。各遺構の詳細については表2・3を参照されたい。

土坑・ピットからの出土遺物は、SP2から土師器椀(3)、SP9から土師器皿(4)や須恵器細片が出土したほか、SK2・6・9、SP5・6・10・14から土師器細片が微量出土している。いずれも詳細な遺構時期の特定は困難であるが、胎土や特徴から概ね中世の範疇を出ないものと考えられる。

3は外側に張り出す高台を持ち、高台接合時の貼付けナデと粘土紐痕跡が明瞭に認められる。平安時代後半頃とみられる。4は軟質で器高が低く、底部から口縁端部にかけて緩やかに立ち上がる。平安時代後期～鎌倉時代とみられる。

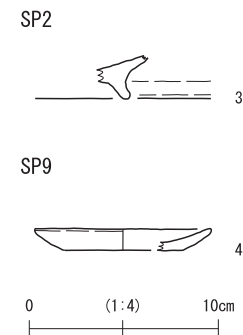


図15 SP2・SP9出土遺物

表2 土坑一覧

SK 番号	平面形	断面形	検出レベル (m)	規模(m)			新旧関係		出土遺物	備考
				長径	短径	深さ	本址より旧	本址より新		
1	不整形	不整形	7.47	1.68	1.61	0.38	-	-		
2	楕円形	皿状	7.58	0.83	0.48	0.07	-	-	土師器	
3	円形	不整形	7.34	0.78	0.67	0.10	-	-		
4	楕円形	不整形	7.34	1.50	1.12	0.14	-	-		
5	楕円形	皿状	7.42	0.54	0.28	0.08	-	-		
6	円形	皿状	7.42	0.51	0.33	0.09	SD2	-	土師器	
7	不整形	皿状	7.41	1.26	0.48	0.12	SD2	-		
8	円形	皿状	7.47	>0.52	0.49	0.12	-	SD2		
9	楕円形	U字状	7.49	0.58	0.42	0.20	-	-	土師器	

表3 ピット一覧

SP 番号	平面形	断面形	検出レベル (m)	規模(m)			新旧関係		出土遺物	備考
				長径	短径	深さ	本址より旧	本址より新		
1	円形	U字状	7.32	0.18	-	0.19	-	-		調査区東壁にかかる
2	円形	U字状	7.31	0.27	0.25	0.32	-	-	土師器	
3	円形	U字状	7.39	0.20	-	0.22	-	-		調査区北壁にかかる
4	円形	U字状	7.37	0.23	-	0.31	-	-		調査区北壁にかかる
5	円形	皿状	7.33	0.27	0.21	0.09	-	-	土師器	
6	円形	U字状	7.45	0.29	0.27	0.41	-	-	土師器	
7	円形	U字状	7.28	0.18	0.18	0.21	-	-		
8	円形	U字状	7.42	0.17	0.17	0.18	-	-		
9	楕円形	凹字状	7.44	0.31	0.25	0.17	-	-	土師器、須恵器	
10	円形	皿状	7.48	0.28	0.28	0.06	-	-	土師器	
11	隅丸方形	U字状	7.46	0.22	0.20	0.19	-	-		
12	隅丸方形	U字状	7.49	0.28	0.28	0.28	-	-		
13	隅丸方形	U字状	7.43	0.21	0.20	0.24	-	-		
14	円形	凹字状	7.41	0.32	0.28	0.20	-	-	土師器	
15	円形	皿状	7.42	0.20	0.20	0.04	-	-		
16	円形	U字状	7.46	0.36	0.29	0.38	-	-		
17	円形	不整形	7.33	0.32	0.26	0.36	-	-		
18	円形	U字状	7.39	0.27	0.24	0.17	-	-		
19	楕円形	U字状	7.27	0.28	0.21	0.13	-	-		

(5) 溝 (SD) (図16、表4・5、写真50～55・60)

溝は5条検出した。遺構確認面の標高は7.44～7.48 m、遺構底面の標高は7.30～7.35 mと概ね共通する。平面形は直線の溝状が多く、断面形はいずれも浅い皿状やU字状を呈する。SD2を除く各遺構の詳細については表4を参照されたい。出土遺物は、SD1から土師器鍋(5)が出土した。

5は体部片で、内外面にハケ調整が施される。中世頃とみられるが、詳細な時期の特定は困難である。

表4 溝一覧

SD 番号	断面形	主軸方向	検出レベル (m)	規模(m)			新旧関係		出土遺物	備考
				幅	長さ	深さ	本址より旧	本址より新		
1	U字状	N-83°-E	7.48	0.2~0.3	1.70	0.12			土師器鍋	
2	U字状	N-80°-E	7.45~7.47	0.26~0.43	9.15	0.16	SK8	SK6・SK7	土師器	
3	皿状	N-86°-E	7.45	0.37~0.45	2.00	0.10				
4	皿状	N-36°-E	7.44	0.25~0.28	1.64	0.10	SD5			
5	皿状	N-78°-E	7.47	0.19~0.36	3.50	0.14		SD4		

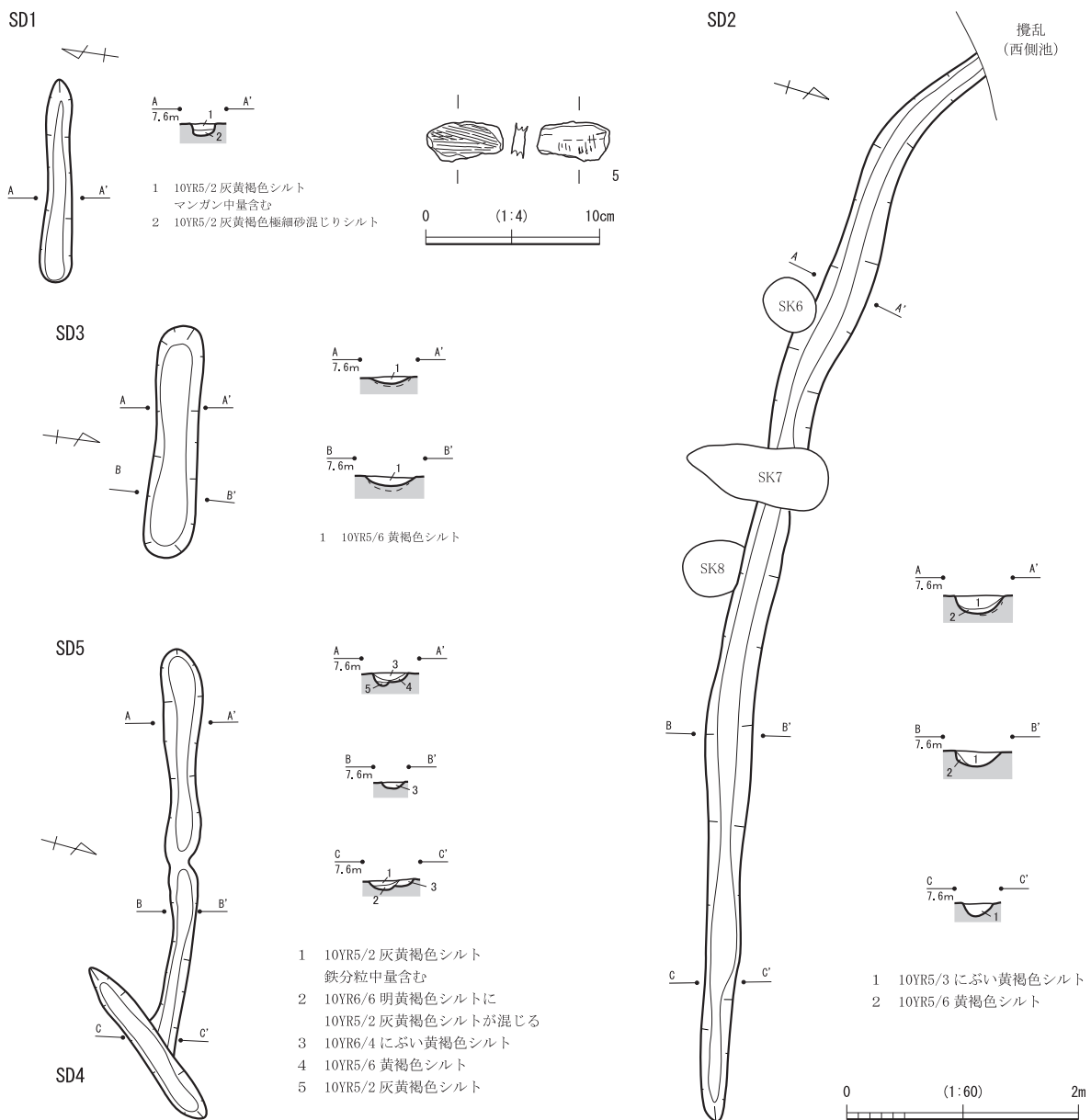


図16 溝 (SD) 1～5

■ SD2 (図 16、表 4、写真 50、51)

位置:F2～4グリッドに位置する。遺構確認面の標高は7.46 mで、遺構底面の標高は7.30 mである。SK8を切り、SK6・7に切られる。遺構の西端は西側池の攪乱に切られる形で調査区外へ及ぶ。主軸方向はN-80°-Eであるが、西側は北西へ向かい弧を描いている。

形態：平面形は細い溝状で、断面形は浅いU字状を呈する。

規模：検出した範囲での長さは9.15 mを測る。幅は0.26～0.43 mを測り、深さは最大0.16 mと浅い。

土層：黄褐色シルトを主体とする。

出土遺物：土師器鍋の細片が微量出土した。

遺構時期：出土遺物の特徴から中世以降とみられるが、詳細な時期の特定は困難である。

(6) 遺構外出土遺物 (図 17、表 5、写真 60・61)

遺構以外では、遺物包含層や遺構検出面、その他攪乱から土師器・須恵器が少量出土した。いずれも残存状況が悪いものの、図化し得た13点を掲載した。遺物の時期は平安時代後半頃から室町時代までと幅広いが、詳細な時期の特定が困難なものも含めて中世頃を中心としている。

6は須恵器蓋の体部とみられる。内外面を回転ナデ調整後、外面になだらかな凹線を2条施す。7は土師器椀である。須恵器椀と共通する器形を程し、回転糸切りの平高台で見込みはやや落ち込む。平安時代後半頃とみられる。8は土師器皿とみられる。体部の中ほどに傾きが変化する段を有し、段から端部にかけては直線的に開く。鎌倉時代頃とみられる。9は須恵器鉢である。口縁端部は降灰の付着によってやや歪であるが、丸みをもった形態である。鎌倉時代前半頃とみられる。10は須恵器甕である。口縁部は上方まで反り返り、端部はやや丸みをもった方形を呈する。鎌倉時代中期～室町時代前期頃とみられる。11は須恵器壺の底部とみられる。平底を回転糸切りし、内面は回転ナデの

表5 遺物観察表

報告番号	出土遺構	種別	器種	法量 (cm)			調整	備考
				口径	器高	底径		
1	SB3-P5	土師器	皿or杯	-	>1.55	-	内外:回転ナデか	
2	SE1	施釉陶器	皿	長径*10.83	1.4	長径*7.3	型押し成形、外:ナデ 内外:緑釉施釉	珉平焼
3	SP2	土師器	椀	-	>2.25	-	内:摩滅により不明 外:高台貼付ナデ	
4	SP9	土師器	皿	*9.3	1.15	*7.33	内外:ナデか	
5	SD1	土師器	鍋	高さ>2.0	幅4.2	厚み0.65	内:ハケメ 外:ハケメ→横方向ナデ	
6	検出面	須恵器	蓋か	-	>1.3	-	内外:回転ナデ	
7	遺物包含層	土師器	椀	-	>1.67	*4.8	内外:摩滅により不明 底部:回転糸切り	見込みに黒褐色付着物
8	遺物包含層	土師器	皿か	-	>2.08	-	ナデ	
9	攪乱(西側池)	須恵器	鉢	-	>3.2	-	内外:回転ナデ→口縁ヨコナデ	自然釉付着
10	遺物包含層	須恵器	甕	*18.8	>2.9	-	口縁:回転ナデ	
11	遺物包含層	須恵器	壺	-	>1.55	-	内外:回転ナデ 底部:回転糸切	
12	攪乱(西側池)	須恵器	甕	高さ>7.0	幅>15.1	厚み1.25	外:平行タタキ 内:工具による押圧→ナデ	
13	検出面	須恵器	甕	高さ>6.05	幅9.2	厚み1.18	内:カキメ状工具ナデ 外:平行タタキ	
14	検出面	須恵器	甕	高さ>5.52	幅7.6	厚み0.95	内:工具ナデ 外:平行タタキ	
15	遺物包含層	土師器	羽釜	-	>3.37	-	摩滅により不明	
16	検出面	土師器	羽釜	鏝部径*19.0	>1.75	-	摩滅により不明	
17	遺物包含層	土師器	甕	*22.5	>3.55	-	内外:ナデ→口縁ヨコナデ	端部～外面に煤付着
18	遺物包含層	土師器	鍋か	-	>3.05	-	内:ナデ 外:タタキ	外面に煤付着

轆轤目が僅かに残る。12～14は須恵器甕の体部である。いずれも内面は指又は板状工具による強めのナデを施し当具痕跡を消している。外面は格子状タタキである。15・16は土師器羽釜である。15は播磨型とみられ、体部から口縁部にかけて内傾し、口縁の先端はやや外反する。鏝部の断面は丸みをもつ三角形である。室町時代前半頃とみられる。17は土師器甕である。いわゆる播但型で、口縁は直立気味に立ち上がり、端部をつまんで整形する。口縁端部に煤の付着が僅かに見られる。鎌倉時代後半頃とみられる。18は土師器鍋類の体部とみられる。外面に粗めのタタキを施す。

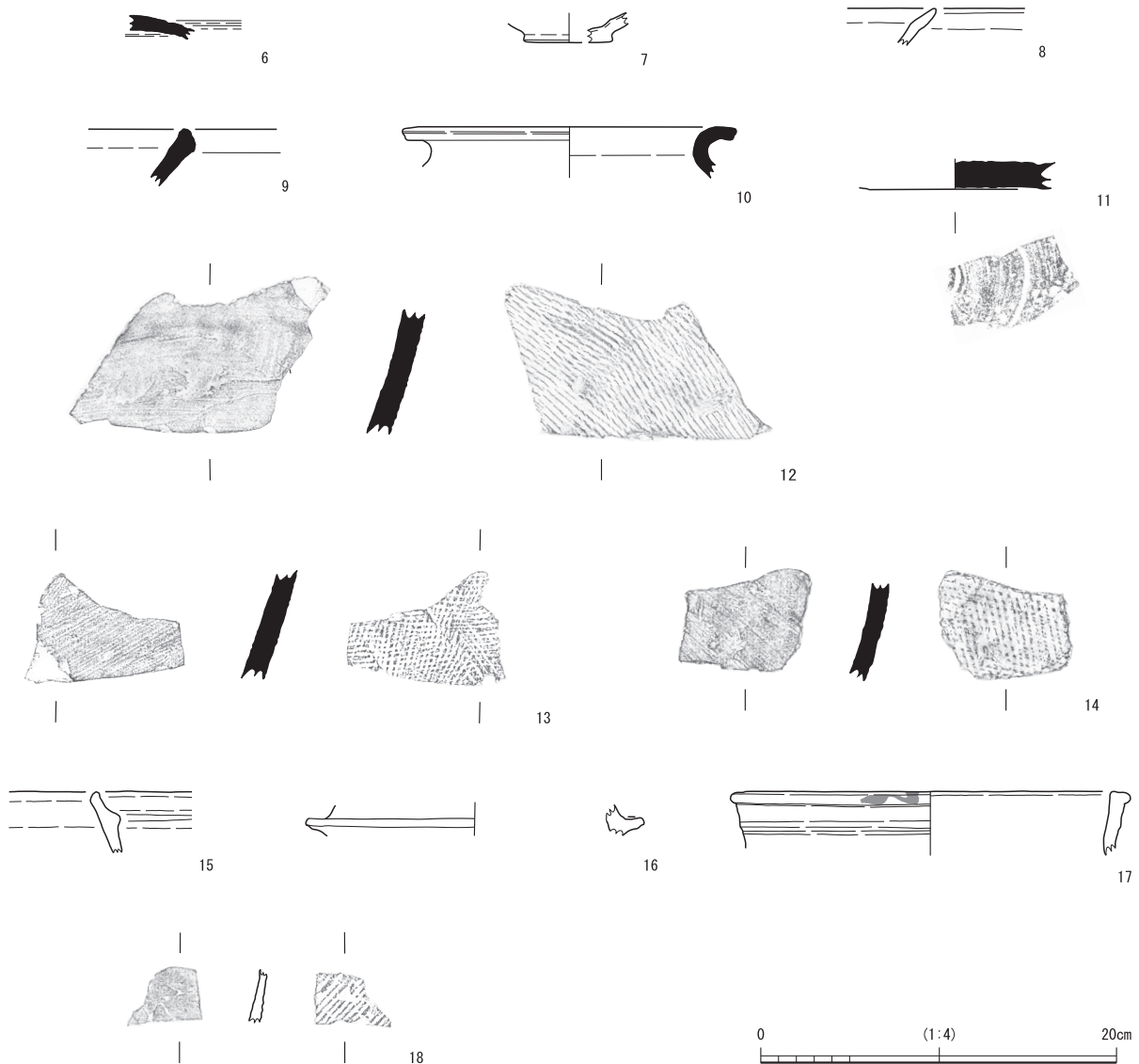


図 17 遺構外出土遺物

第Ⅲ章 総括

岸東遺跡の包蔵地範囲内で計画された宅地造成工事に伴って、遺跡が破壊されてしまう範囲 503㎡で発掘調査を実施した。その結果、合計 38 基の遺構を検出し、中世を中心とする遺物が出土したことから、本遺跡が中世の集落遺跡であることが明らかとなった。以下、調査成果を基に簡単な考察を述べ、本報告のまとめとしたい。

検出された遺構は、掘立柱建物跡 3 棟、柱穴列 1 列、井戸 1 基、土坑・ピット 28 基、溝 5 条である。掘立柱建物数は 3 棟で、建物規模はいずれも小型とみられ、南北方向の柱穴列を基準とした場合の方位は N-10° -W から N-19° -W の範囲に収まる。柱穴列としている SA1 についても、主軸方位が各掘立柱建物の梁行とほぼ平行しており、これらはほぼ同時期に存在したか、土地利用形態や地割が共通する条件下で建てられた可能性が高いとみられる。溝状遺構は、SD4 以外の主軸方位が各掘立柱建物の梁行方位とほぼ平行しているものの、他遺構との配置関係や、建物と重複していることから考えると、屋敷地における区画溝とは捉え難く検討の余地がある。一方、1 基のみ確認された井戸は、埋土に珉平焼の施釉陶器が含まれていることから近代以降に埋没した遺構とみられ、他遺構と同時に存在した可能性は低いと考えられる。

出土遺物は、遺物包含層などの現位置から遊離したのものも含めると、11 世紀後半から 15 世紀中頃にかけての特徴を有する須恵器・土師器が出土しており、時期不明の土器片を除けば、これより遡る遺物はほぼ見られない。時期的特徴が明らかなものには、神出窯跡や魚住窯跡産と考えられる東播系須恵器や、土師器煮炊具に播磨型羽釜、播但型甕などの在地的な特徴を示すものが多く見られる。遺構に伴う遺物は細片がほとんどで、遺構毎の時期差を詳細に検討することは困難だが、概ね平安時代後期から室町時代頃までこの地で人的活動が見られたことは明らかである。

令和元年度実施の確認調査では、事業対象地の中央東側（今回調査の SB1 より北側周辺）を中心に土坑・ピットや溝が複数確認されており、今回調査と概ね同時期とみてよい土師器・須恵器片が出土している。一方、北側池より北の範囲では遺構・遺物は確認されなかった。これを踏まえて実施した今回調査では、調査区の東から南西にかけて遺構が確認され、特に南西側に集中する傾向が見られた。調査区の南及び南西際に見られる崖状の段差は後世の改変により形成された可能性が高く（註）、かつての平坦面は既に削平されたとみられるものの、本来は調査区より南西に集落範囲が続いていた可能性が考えられる。

今回検出された集落跡は、掘立柱建物の分布や規模、近隣で生産される在地土器が多く出土していることから、中世村落で一般的といえる、農耕を生業とする集落であった可能性が考えられる。古代から中世にかけての集落形態の遷移については、古代集落の解体以降に 11 世紀後半から新たな集落が出現し、その後 14 世紀から 15 世紀にかけて、屋敷地が各戸で孤立するこれまでの散村形態から現在の地域集落にも見られる集村形態へと移行することが全国的な傾向として認められている。本遺跡についても、このような動向のなかで平安時代後期頃に出現し、室町時代の後半には集村化とともに他集落へと移動していった村落の一部とみてよいであろう。

加古川右岸における中世の集落様相は未だ判然としていない。今回調査によってその一端を窺うことができたといえるが、今後、居住域だけでなく耕地や墓地も含めた集落全体の解明が期待される。

最後になりましたが、発掘調査及びその整理作業にご協力くださった全ての皆様と、遺跡保護にご尽力くださった事業主の株式会社関西住宅販売様に心より感謝申し上げます。

註) 西神吉町岸周辺では昭和 30 年代頃に煉瓦製造の土取り作業が頻繁に行われており、西に近接する岸遺跡では、昭和 34 (1959) 年の発掘調査時に工事によって台地が削られた部分に崖状の段差が存在したという (加古川市教委 1961)。調査区南西の土地区画は昭和 40 (1965) 年頃撮影の航空写真で既に確認できることから、当時は調査地周辺においても岸遺跡と同様の状況下にあった可能性が考えられる。

<引用・参考文献>

- 今里幾次・置田雅昭・田中眞吾・西谷眞治 1996 「加古川市の考古遺跡と遺物」『加古川市史』第 4 巻 加古川市
岡崎晋明 2011 「まとめ」『竜山古墳群』高砂市文化財調査報告書 15 高砂市教育委員会
岡田章一・仁尾一人 2005 「出土遺物について」『珉平焼窯跡』兵庫県文化財調査報告第 284 冊 兵庫県教育委員会
岡田章一・長谷川眞 2003 「兵庫津遺跡出土の土製煮炊具」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要 第 3 号』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
加古川市教育委員会 1961 『岸遺跡発掘調査報告』加古川市文化財調査報告 1
加古川市教育委員会 1970 『加古川市の埋蔵文化財』
加古川市教育委員会 2022a 『加古川市遺跡分布地図 - 第 4 版 -』
加古川市教育委員会 2022b 『加古川市文化財年報 第 5 号 令和元 (2019) 年度』
北垣聰一郎 1981 「魚崎構居」『日本城郭大系 12 大阪・兵庫』新人物往来社
橘川真一 2004 『播磨の街道『中国行程記』を歩く』姫路文庫 10 神戸新聞総合出版センター
佐久間貴士 1994 「発掘された中世の村と町」『岩波講座 日本通史 中世 3』岩波書店
清水一文 2014 「総括」『石の宝殿・竜山石採石遺跡』高砂市文化財調査報告書 17 高砂市教育委員会
清水一文・藤原光平 2021 「加古川下流域の遺跡」『兵庫県の古代遺跡 1 摂津・播磨』神戸新聞総合出版センター
田岡香逸 1985 「第 4 章 石造美術」『加古川市史』第 7 巻 加古川市
田中眞吾 1989 「加古川市付近の地形と地質」『加古川市史』第 1 巻 加古川市
兵庫県教育委員会 1982 『兵庫県の中世城館・荘園遺跡 - 兵庫県中世城館・荘園遺跡緊急調査報告 -』
深江英憲 2003 「中西台地遺跡の調査成果」『北谷・中西台地遺跡』兵庫県文化財調査報告第 255 冊 兵庫県教育委員会
別府洋二 1991 「考察」『大国山遺跡』兵庫県文化財調査報告第 110 冊 兵庫県教育委員会
間壁霞子 2007 「第 1 章 考古」『高砂市史』第 4 巻 高砂市
山田清朝・中川 渉 2010 「まとめ」『大野遺跡』兵庫県文化財調査報告第 380 冊 兵庫県教育委員会
渡辺 昇 2009 「おわりに」『坂元遺跡Ⅱ』兵庫県文化財調査報告第 366 冊 兵庫県教育委員会

圖 版

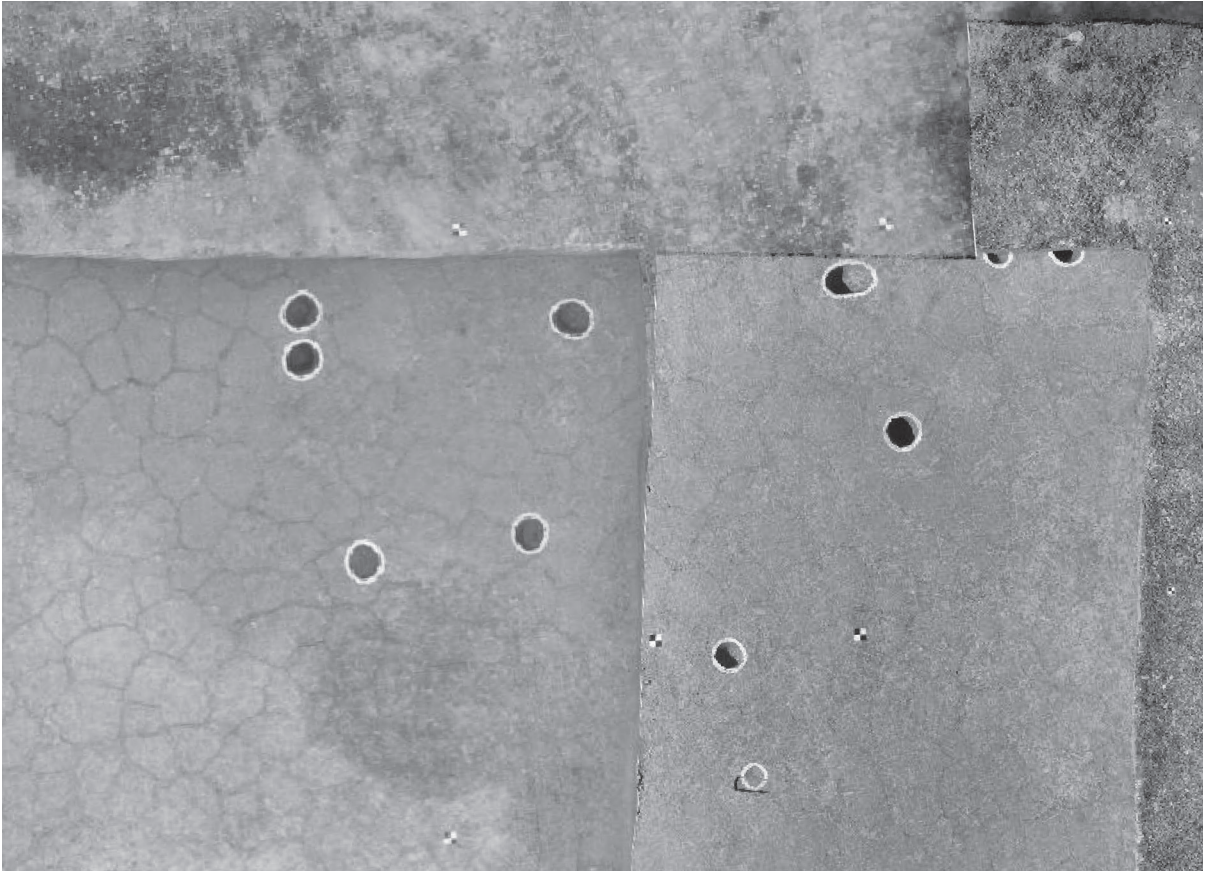


写真5 SB1 (下が南)



写真6 SB1 P4 (西から)

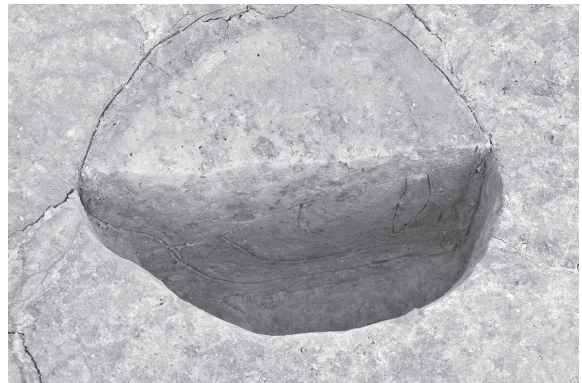


写真7 SB1 P4 断面 (西から)

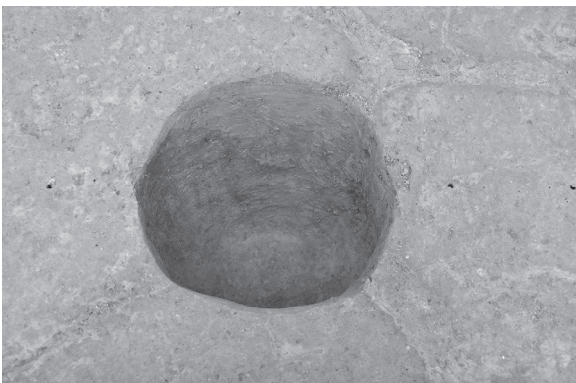


写真8 SB1 P6 (南西から)

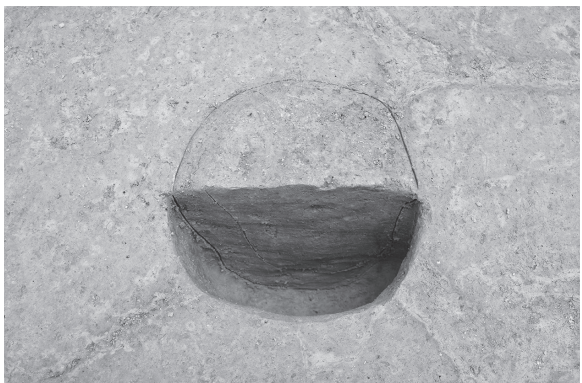


写真9 SB1 P6 断面 (南西から)

図版2

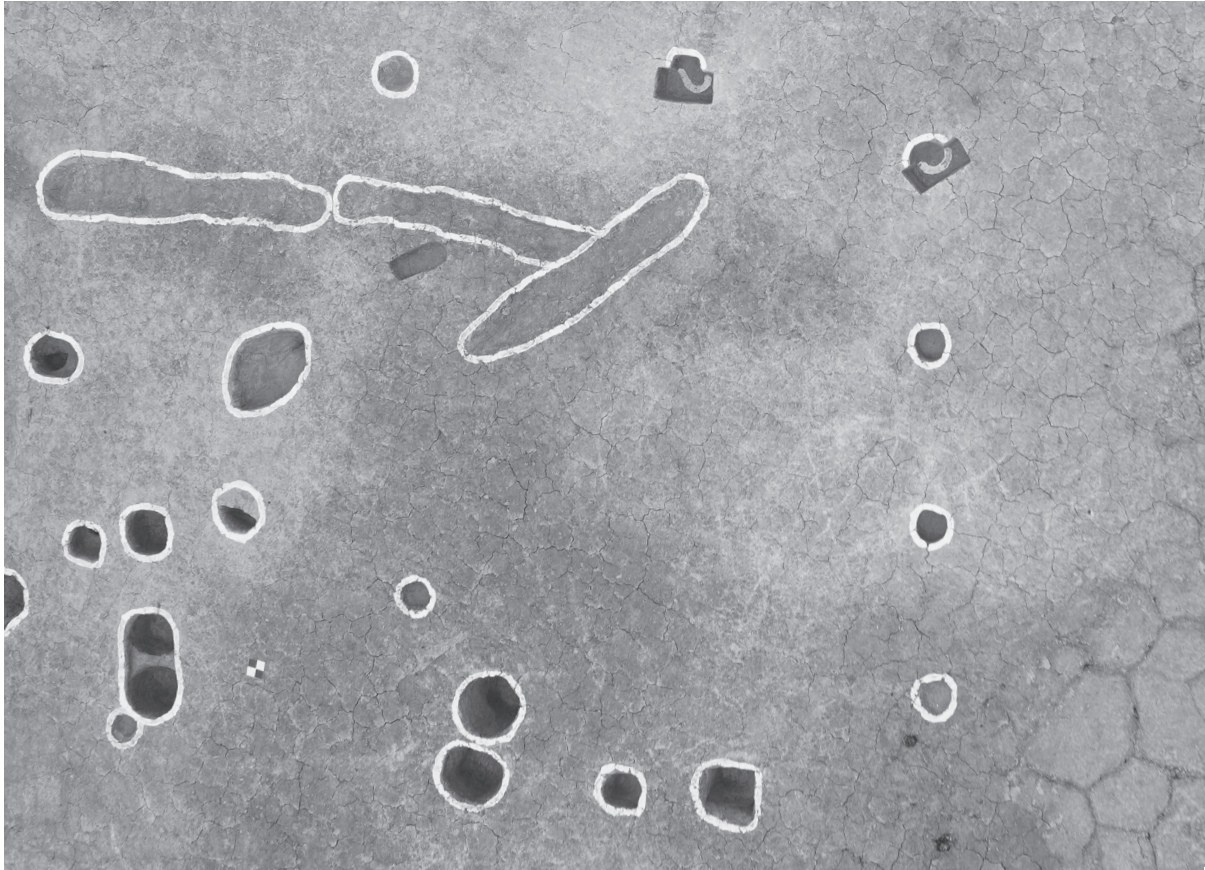


写真10 SB2 (下が南)



写真11 SB2 P2 断面及び柱根状況 (南から)



写真12 SB2 P3 断面及び柱根状況 (南東から)



写真13 SB2 P5 断面 (南東から)



写真14 SB2 P7 断面 (南東から)



写真 15 SB3 検出 (東から)

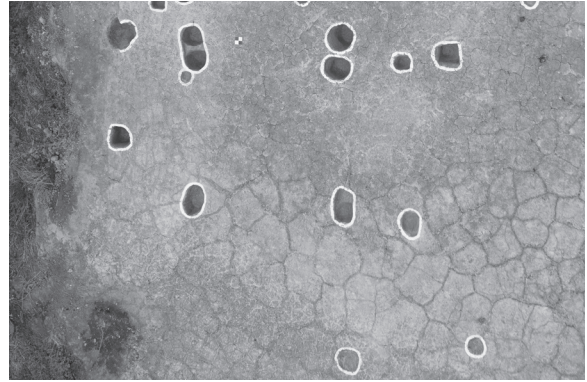


写真 16 SB3 (下が南)



写真 17 SB3 P1 断面 (東から)

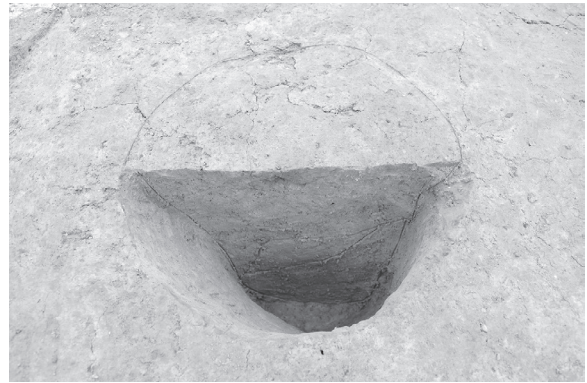


写真 18 SB3 P2 断面 (南西から)



写真 19 SB3 P3 断面 (東から)



写真 20 SB3 P4 断面 (東から)

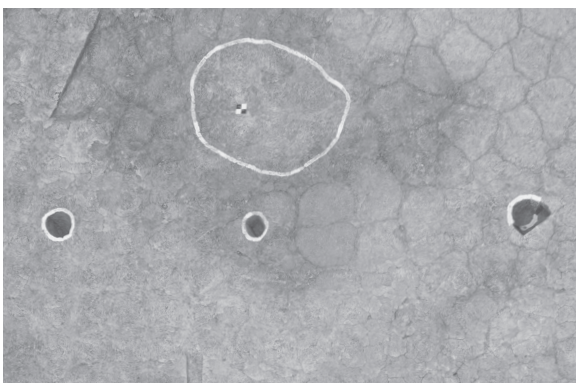


写真 21 SA1 (下が南)

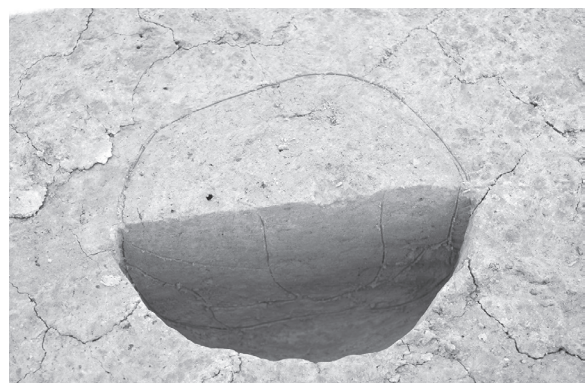


写真 22 SA1 P1 断面 (北東から)

図版4

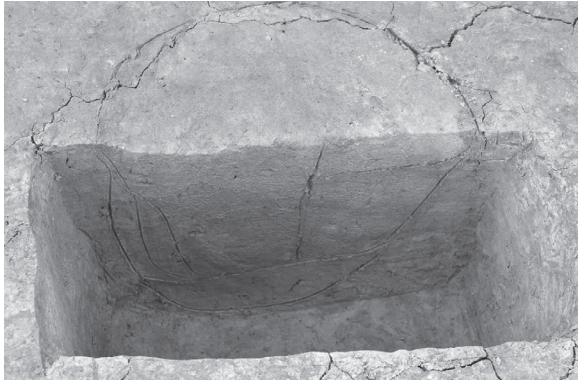


写真23 SA1 P3 断面 (南東から)



写真24 SE1 検出 (南から)



写真25 SE1 (南西から)



写真26 SE1 上層 断面 (南西から)



写真27 SE1 下層 断ち割り状況 (南西から)



写真 28 SK1 (南から)



写真 29 SK1 断面 (北から)

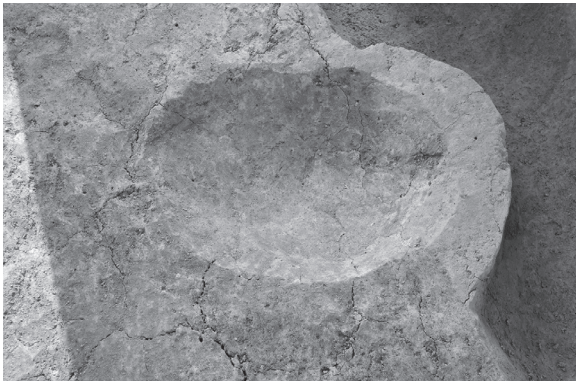


写真 30 SK6 (東から)



写真 31 SK6 断面 (東から)

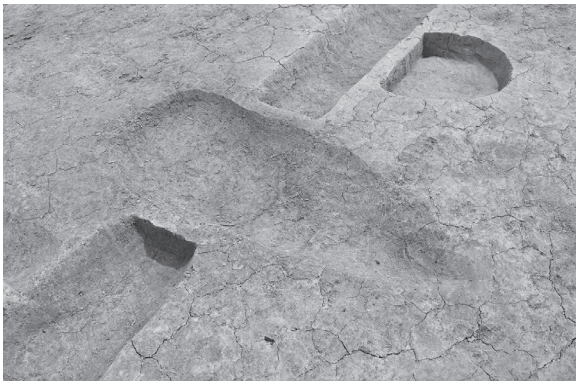


写真 32 SK7 (南西から)



写真 33 SK7 断面 (東から)



写真 34 SP2 (南から)



写真 35 SP2 断面 (南から)

図版6



写真 36 SP3 断面 (南から)



写真 37 SP4 断面 (南から)

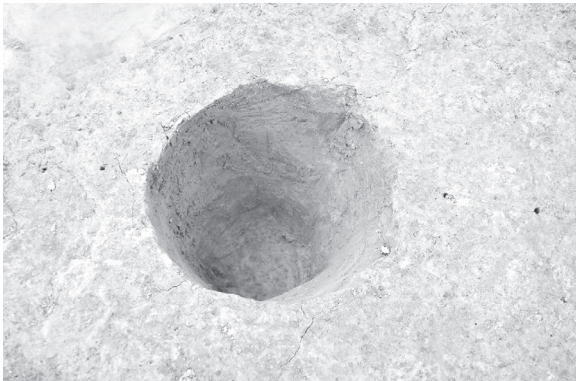


写真 38 SP6 (東から)



写真 39 SP6 断面 (東から)

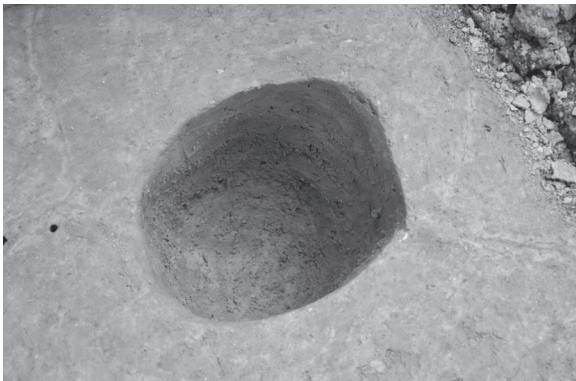


写真 40 SP7 (北東から)



写真 41 SP7 断面 (北東から)

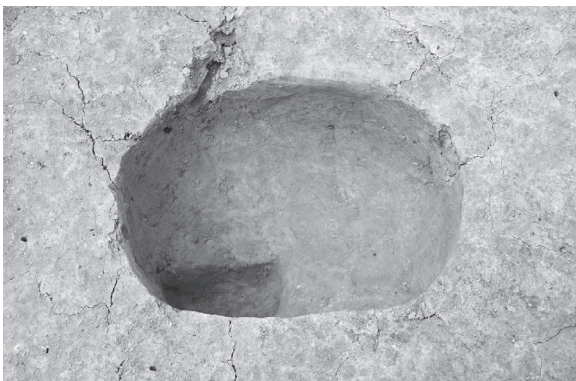


写真 42 SP9 (南から)



写真 43 SP9 断面 (南から)

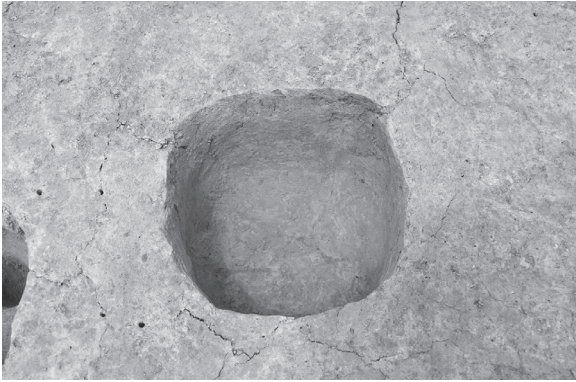


写真 44 SP12 (南から)

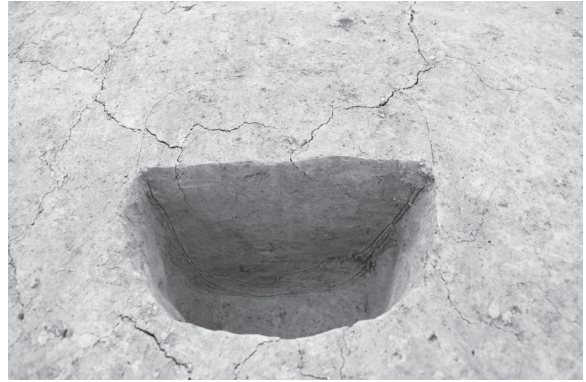


写真 45 SP12 断面 (南から)

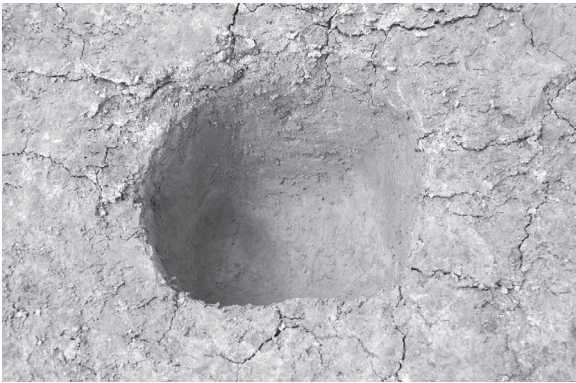


写真 46 SP13 (南から)



写真 47 SP13 断面 (南から)



写真 48 SP16 (南から)

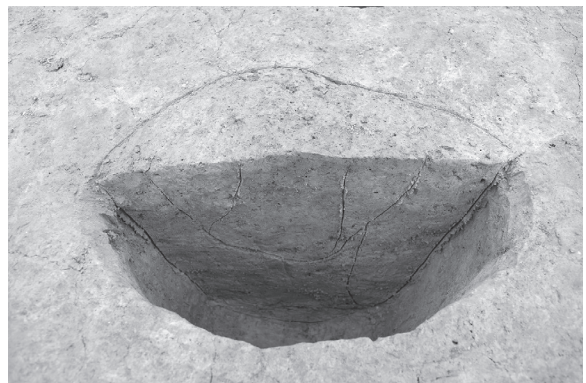


写真 49 SP16 断面 (南から)



写真 50 SD2 (東から)



写真 51 SD2 断面 A-A' (東から)

図版 8



写真 52 SD3 (東から)



写真 53 SD3 断面 B-B' (東から)



写真 54 SD4・5 (東から)



写真 55 SD4・5 断面 C-C' (東から)



写真 56 基本層序 A-A' (南東から)



写真 57 基本層序 B-B' 下層確認 (南から)



写真 58 基本層序 C' 地点 (西から)



写真 59 北側池 下層確認状況 (南東から)

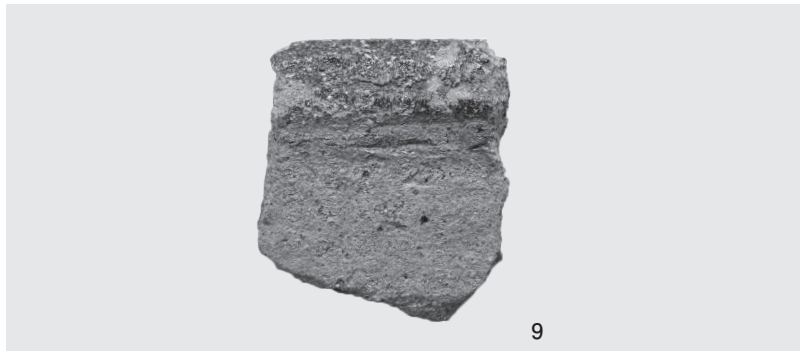
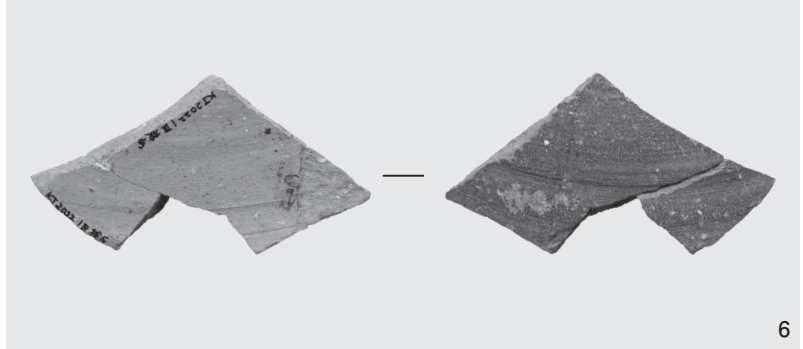
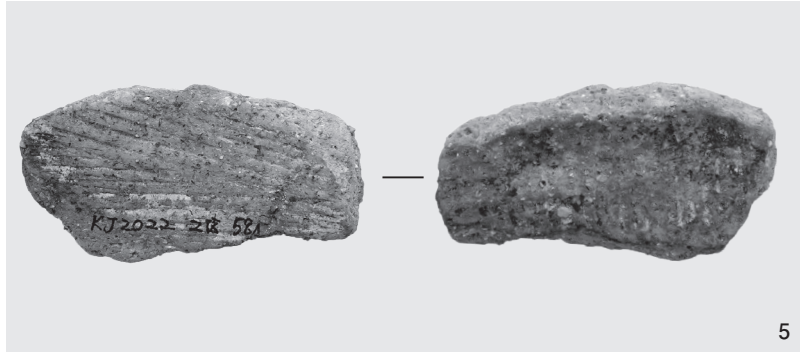


写真60 実測遺物1~10

図版10

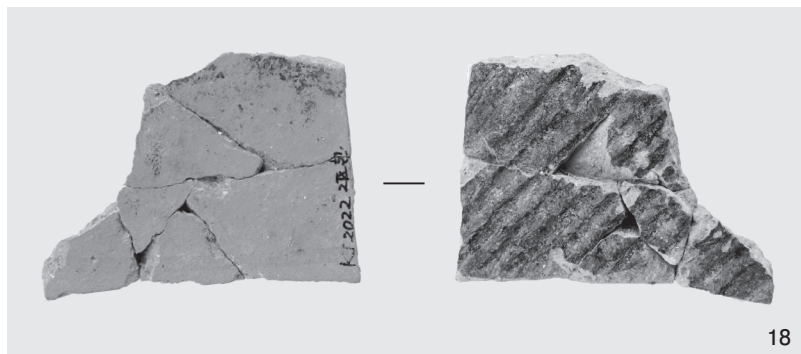
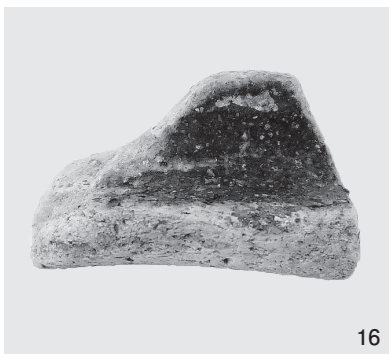
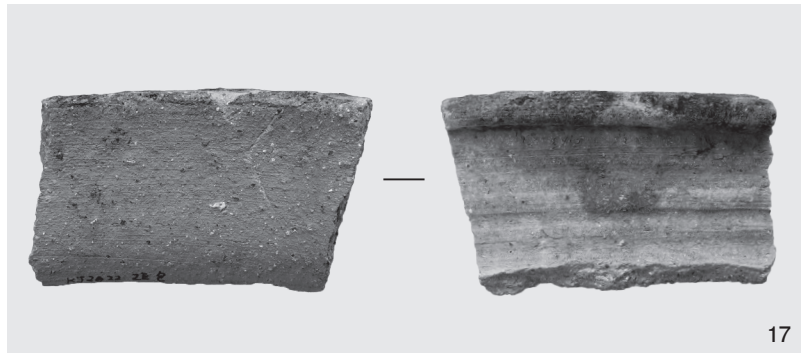
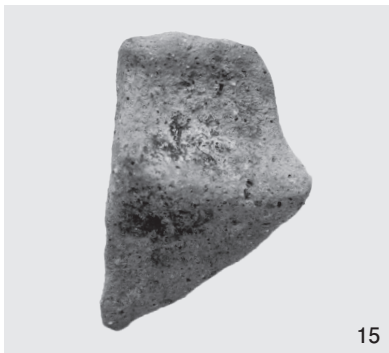
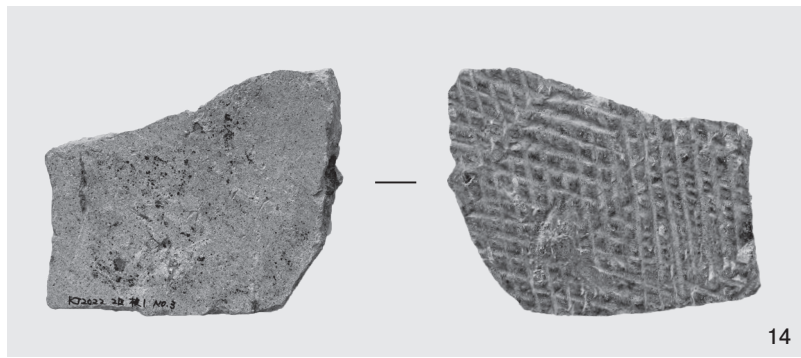
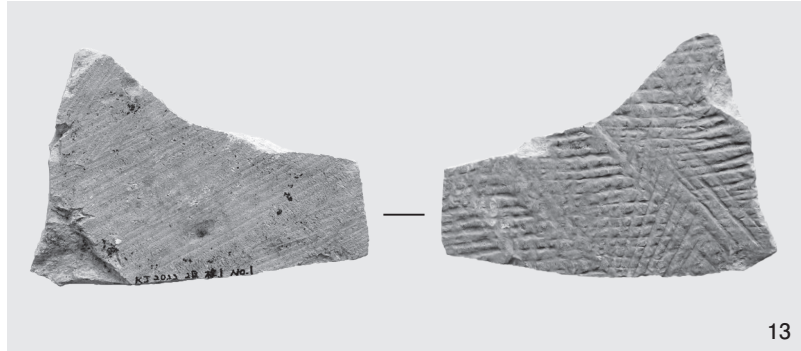
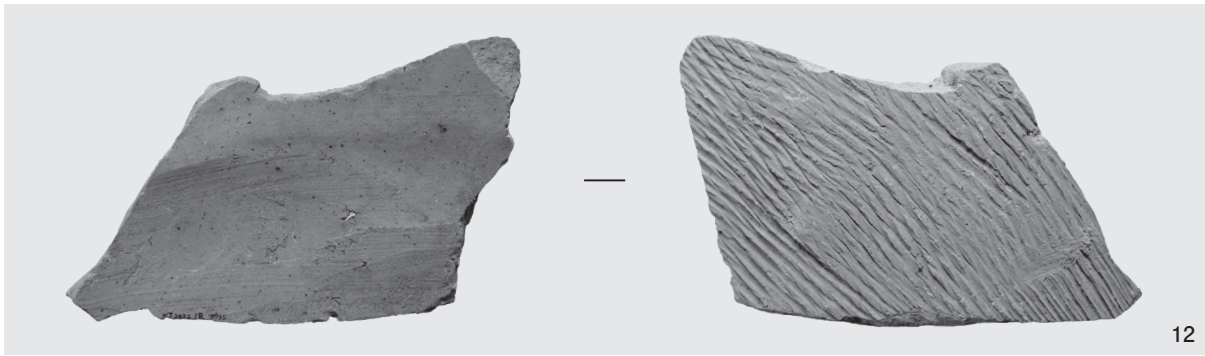


写真61 実測遺物11~18

報告書抄録

ふりがな	きしひがしいせきはつくつちょうさほうこくしよ							
書名	岸東遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	加古川市文化財調査報告							
シリーズ番号	37							
編著者名	古林舞香							
編集機関	加古川市教育委員会							
所在地	〒 675-0101 兵庫県加古川市平岡町新在家 1224-7							
発行年月日	西暦 2024 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きしひがしいせき 岸東遺跡	ひょうごけん 兵庫県 かこがわし 加古川市 にしかんきちやう 西神吉町 きし 岸 691 外	28210	110514	34° 47' 38"	134° 48' 40"	20200513 ～ 20200610	503㎡	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
岸東遺跡	集落	平安時代後期 ～ 室町時代	掘立柱建物跡	3 棟	土師器 須恵器			
			柱穴列	1 列				
			井戸	1 基				
			土坑・ピット	28 基				
			溝状遺構	5 条				
要約	<p>宅地造成工事に伴い、工事で破壊される部分について発掘調査を実施した。</p> <p>調査の結果、掘立柱建物跡を中心とする集落遺構が検出され、平安時代後期から室町時代にかけての土器が出土した。</p> <p>岸東遺跡の発掘調査は今回が初であり、一般的な中世村落の一部を確認したとともに、加古川右岸における集落様相の一端を窺うことができた。</p>							
資料の保管機関	加古川市教育委員会 文化財調査研究センター 〒 675-0101 兵庫県加古川市平岡町新在家 1224-7							

加古川市文化財調査報告 37

岸東遺跡発掘調査報告書

令和6（2024）年3月31日

編集・発行 加古川市教育委員会

〒675-0101 兵庫県加古川市平岡町新在家 1224-7

TEL 079-423-4088

印刷 matsuuru 株式会社

〒671-0247 兵庫県姫路市四郷町東阿保 1391-2

TEL 079-222-9967